

われわれの教育活動

2006 年度総括と 2007 年度方針

28

2007 年 4 月

一橋大学スポーツ科学研究室

われわれの教育活動

2006年度総括と2007年度方針

28

目次

はじめに	3
・われわれの教育活動をめぐる状況	4
1．大学をめぐる政策動向	4
2．本学の動向と運動文化科	5
・2006年度の教育活動の成果と課題	7
1．カリキュラム編成と体制	7
2．2006年度の教育活動の成果と課題	8
(1) スポーツ方法	8
(2) スポーツ方法	14
(3) スポーツ科学・健康科学	19
(4) 教養ゼミ	23
(5) 学部講義・ゼミ	24
(6) 大学院講義・ゼミ	27
3．教育条件の整備・拡充	29
・教育部活動	34
1．実践交流会	34
2．教育活動日誌	34
3．調査活動	35
4．教育部の活動・体制	38
・2007年度教育活動の方針	39
1．2006年度の達成と課題	39
2．2007年度の基本方針	40

3 . 教育活動	41
(1) 2 0 0 7 年度のカリキュラム編成と体制	41
(2) カリキュラム、および教育内容・方法の充実	42
4 . 教育条件の整備・拡充	43
5 . 運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整	44
6 . カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究	44
7 . 教育部の活動	44
(1) 諸行事の開催	44
(2) 調査活動	44
(3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行	44
(4) 2 0 0 7 年度教育部関係日程（案）	44

年間計画

資料 1 . 2 0 0 6 年度時間割

- 2 . 「スポーツ方法」「スポーツ方法」に関するアンケート調査用紙
- 3 . 「スポーツ方法」「スポーツ方法」に関するアンケート調査結果
- 4 . 実践報告：バドミントンの授業（新村博信）
- 5 . 実践報告：ジャズダンスの授業（白河善美）

はじめに

独立法人化して丸3年が経った。当初は中期計画の策定とその実行のために、多忙感が全体を支配していたが、最近が多忙化状態の中で、少々「安定」している。

我が運動文化科では約30年前からこの『われわれの教育活動』を作成し、方針・実行・評価を行い、授業改善に努めてきたから、学内のFDそれ自体の動向には違和感はなく、むしろ先行してきた「優越感」はあった。そして、近年始まった学生による授業評価でも運動文化科目は高評価を得ているが、それはこうした蓄積が反映していると自負している。

その実施には理論と作業とで大変なエネルギーが必要となる。われわれも年度の総括・方針を検討するだけでなく、もちろんそれ自体だけでも非常に重要なことであるが、新たな課題には「実践検討会」「実践交流会」を設けて研究し、交流してきた。それらによって授業の質を高め、学生把握の能力を高め、そして教師の相互討論の基盤を形成してきた。その一端は本報告にも記述されている。

近年共通教育領域でも全体としてこうした評価活動の必要性を聞くようになったが、そのことは歓迎したい。共通教育軽視の動向も一部にあるが、共通教育の全体的な上昇がそうした偏見を変える一助となるのであれば、運動文化科としても積極的に参加したい。

この間の非常勤講師削減(コマ数、単価)、退任者補充の1年延期等はボディーブローとストレートパンチを同時に食らった衝撃である。ダウンもせずに、そして教育の質も落とさずにやって来られたのも、非常勤講師の方にも支えられてのことであり、御礼を申し上げたい。そして引き続き厳しさの中で旧倍のご努力をお願いすることになる。

年々学生の質、抱える課題も変化する。これは小中高の生徒ばかりではなく、大学でも同様である。学生たちの変化に対応できる意欲と柔軟性もまた日常的な研究・検討を基盤として可能であろう。

大学での仕事は「研究・教育・行政」である。本報告は教育に関するものであるが、行政もまた多くの時間を要している。結局研究時間を喰いながら進まざるをえないところに矛盾と苦悩を抱えている。我々は本報告とともに『スポーツ研究』も発行している。両者を並べて読んで頂けるよう、希望したい。

2007年3月 内海 和雄

．われわれの教育活動をめぐる状況

1．大学をめぐる政策動向

安倍政権は、5年半に渡った小泉政権から、さまざまな課題と問題を残したまま交代したが、とりわけ1947年の制定以降初めて教育基本法が改定されることとなったことは、戦後の大きな節目をつくったといえる。

昨年、大きな社会問題となった「いじめ」やその問題に適切に対処できなかった教育委員会、現場である学校への批判が、早急で具体的な教育の改革を求める世論となった。だが、この教育基本法の改定が、単なる教育行政についての改革にとどまらないことは、多くの論者によって指摘される。渡辺治は、安倍政権にとって「教育再生」プランは、憲法改正の突破口とされていると指摘している（『クレスコ』2006年12月）。今回の教育基本法の改定においては、いかにして「愛国心」を盛り込むかという点が大きな焦点の一つであり、最終的には教育目標に「我が国と郷土を愛する態度を養う」との表現で記述されることとなった。憲法改定への動きと連動して、今後どのように教育の現場にこれらの表現が影響を与えるのかについては、強い危惧を覚える。格差社会を促す構造改革や、競争へと駆り立てられる教育の現状については、学校評価の普及による教員への締め付けや、ゆとり教育の廃止、エリート養成教育へのいっそうの投資により、さらに深化していくことが懸念される。

他方で、大学をめぐる政策動向として注目されるのは、新教育基本法に、大学の役割についても明確に記される点であろう。そこでは、「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする」とされている。もとより、高等教育の発展や社会への貢献について疑いをはさむものではない。しかし、1991年大綱化以降の大学個性化と競争の激化は、教養教育が廃止の方向をたどり、大学院教育の重点化と実質化、国際的な通用性や信頼性の向上などがいわれる中で、企業が求める「即戦力」としての専門性を身につけた学生を育てることが促進されてきた。新しい教育基本法が示している大学の役割は、この方向をよりいっそう強く押し進めるといえるだろう。

他方で、誰もが膨大な情報を入手できる現代社会において、深いけれども狭い「たこつぼ」化した専門知識ではなく、情報を多角的に検討し、さらに「広く深く」展開する知識をもった人間の育成も急務とされている。1998年、大学審議会が「教養教育の軽視」に警鐘を鳴らし、2002年には中央教育審議会が「新しい時代における教養教育の在り方」を文科相に答申、教養教育軽視を批判し、再構築を求めている。教養教育重点大学の設置もあったが、専門分野に固執したり、分断したりするのではない、幅広い領域間の連携と多角的な視点の養成を求める「リベラルアーツ」の大学教育への「復活」は、あらたに学際的な試みとして注目される（玉川大学のリベラルアーツ学部や桜美林大学での学群制など）。

しかし、大学を巡る環境はますます厳しくなっている。国立大学法人の経営基盤については、運営費交付金が効率化係数により年1%ずつ抑制されていくものであり、すでに多くの大学において、研究・教育環境の悪化が指摘されている（全大教2005年「法人移行後の教職員職場実態調査」等）。成果や結果が拙速には求められない基盤的研究や、新しい実験的な教養教育の

あり方などを支える確かな経済的基盤の確保の重要性が、法人化が進むにつれてますます明らかになってきているといえる。

本学においても、定年退職後の後任の不補充あるいは採用の遅れ、非常勤講師の削減および単価切り下げ等で人件費を抑制し、経済基盤安定のための対応としている。だが、他方で、カリキュラム改革、外部資金獲得のための数々のプロジェクトの立ち上げなどは、むしろ、多様で豊富な経験を持った多くの人材を必要とする。十分な人材を確保できないことによって、後述するように事務系統を含め、現場では混乱と疲弊を産みだしているといえるのである。

体育・スポーツを巡る政策動向を見ると、2000年9月に策定された文科省『スポーツ振興基本計画』の見直し(2006年9月)においては、「健康」「体力」の問題が重視されている。「見直し」では、「昨今、子どもの体力の向上が心身の健全な発達の上で大きな課題となっていることにかんがみ、外遊びやスポーツ等を通じた『子どもの体力の向上』を、新たに政策課題の1つ目の柱とする」とされており、さらに、「生涯スポーツ・競技スポーツと学校体育との連携」を、計画全体の理念として各施策の中に反映していくことが目指されている。生涯学習や地域との連携においては、大学の役割についても言及されている。指導者等の育成や再教育(リカレント)さらに「施設、人材等の面でスポーツに関する豊富な資源を有している大学等においては、学生等のスポーツ活動の充実はもとより、地域の一員として地域スポーツ振興に積極的に関わり、総合型地域スポーツクラブの育成に参画することが期待される」のである。

このような視点から、大学における体育・スポーツ教育の意味が問われてくる。辻田純三は、医科大学における保健体育科目の必要性について、学生の体力・気力を充実させるだけではなく、社会性、協調性、自主性を身につけ、また医療に携わっていく人間として、自らの運動体験を通して、多様な人びとの身体について理解を深めることの重要性を指摘している(『保健の科学』48巻、8号、2006年)。このような指摘は、医療関係者に限られるものではないだろう。身体を媒介に多様な人びととの共同を理解し、実践する主体の育成が大学教育において求められており、そこにおける体育・スポーツの役割が認識されているといえる。

とはいえ、文科省が懸念する「健康」「体力」問題に対しても批判的な視点が必要であり、またそれらを支える財源であるスポーツ振興投票制度(サッカーくじ)については、制度自体の破綻も懸念される。「計画」が実践されうるような、現実的な財政保障が求められる。

2. 本学の動向と運動文化科

国立大学も法人化3年目となり、最初の中期計画の前半が経過したことになる。2007年度には、大学評価・学位授与機構による認証評価を受けることが決定しており、法人化後の新しい制度についての検討や導入が加速度を増して進行している。

昨年立ち上がった全学共通教育WGによる全学共通教育カリキュラム改革については、4月教授会において再度のサウンディングが行われた。ここでは、「英語のコミュニケーションスキル向上目標と手段について」が中心となり、第二外国語の扱い(必修か選択か)、一年時におけるゼミナール方式の導入的教育についてなどが検討された。これらは各教授会での意見聴取を参考にしてはいるが、昨年提示された改革案からは大きく筋をはずれるものではなく、ここで

も同様に運動文化科目および数理・情報科目への特段の言及はなかった。各教授会からの意見が分かれていることは、教養教育、共通教育に対する全学的な合意の形成の難しさを示しているといえる。今後、本学ではどのような学生像を描くのか、そしてそのためにどのようなカリキュラム体系を構築するのかが問われていくことになるだろう。

他学部・研究科によるカリキュラム改革も進行しつつあるなか、新たに商学部においては、2007年4月から新カリキュラム体制がスタートすることとなる。MBA 拡充を背景に、大学院教育と学部教育が一体となり、より専門性、独自性の高い授業が展開されると予想される。そのなかで学部科目である「スポーツ産業論」は「スポーツビジネス論」と名称が変更されるが、そこでは授業内容がより専門化され、商学部関連科目としての位置づけがいつそう明確に打ち出されることとなるだろう。このように、各学部で進行している学部改革、大学院重点化において、専門性と共通教育がどのように関連するのか、注視するべきであり、社会的な状況もふまえながら、運動文化科としてははっきりと意見表明をしていくことが求められるだろう。

来年度は、大学の教員制度が大きく改編される。2005年1月の中央教育審議会（鳥居泰彦会長）の審議を受けて、「教授・助教授・講師・助手」を、「教授・准教授・講師・助教・助手」へと改める新教員制度が、本学でも2007年4月から施行される。いまだ全体像は明確であるとはいえないが、10月に行われた説明会および組合との学長交渉では、「現行の助手制度を大きく改編するものではない」ことが強調されていた。にもかかわらず、附属図書館及び社会科学古典資料センターにおいては「専門助手」が設けられ、新しく採用される助手には任期制が採用されている。職務の内容においては、各研究科、研究所あるいはそれぞれの講座等の具体的な状況を反映することになるだろう。しかし、現行の助手制度に「複雑な差別化」が持ち込まれることで、職務の煩雑化、教育・研究環境の悪化が呼び込まれないように、また、任期制が導入されることで不安定な労働環境、研究状況がもたらされないように、新制度がどのように実施されていくか注視していく必要がある。

大学運営の効率化は、単に教員制度の見直しによってのみ改善されるものではないだろう。その点で、大学事務体制の改善もまた重要な要件であると考えられる。2006年度にはいくつかの事務システムの混乱が見られた。それが法人化後の人件費と人員の削減の中で、事務の繁雑化、多忙化によってもたらされており、十分な専門的業務の修得や引き継ぎがなされないなかでの混乱であるとするならば、大学事務組織の見直しが必要ではないか。とりわけ、運動施設は、授業、クラブ・サークル等の課外活動、さらに一般学生によって複合的に利用がなされている施設である。そのため、施設課、教務課、学生支援課といった関係部署での横の連携がほとんど見られない現状に伴う問題点が、いつそう明らかになりやすいといえる。年度当初に突然持ち上がったのは、新体育館建設予定地におけるボクシング部の部室建設計画であった。一昨年から同部OBにより大学に打診されていたものとされるが、運動文化エリアにはまったくの寝耳に水の出来事であった。これについて、緊急に田崎教育担当副学長（当時）と面談を行った（2006年5月11日）。

この件で露呈されたのは、大学当局によるキャンパス利用計画のあまりにも杜撰な状況といわざるをえないだろう。1997年の国立キャンパス移転からすでに10年あまりとなるが、運動場など一定のスポーツ環境の整備が完成し、総合体育館の建設が待たれる。法人化によりますます財政が逼迫していくなかで、とりわけ運動施設整備をOBによる寄付金や申し出に頼らざ

るをえない状況や、それを無下に断れない歴史的背景も理解できる。また、運営費交付金と施設整備費が別なために、施設整備の計画に困難が伴うという点も指摘されているとおりである。しかしながら、大学がより厳しい経営競争にさらされるなかでは、場当たりの諸施設の建設ではない、長期的な視野に立ったキャンパスの利用計画は、大学の教育の魅力や独自性をアピールする上でも、いっそう必要とされているのではないだろうか。移転 10 年が経過し、新たに全学的な施設整備の点検、見直しが求められる段階にきている。例えば、学生の中からは、フットサルコート建設についての要求運動も持ち上がっている。狭隘なキャンパスにおける学生アメニティの整備の必要性を物語ってはいただろうか。正規のカリキュラムだけが学生の学びの場ではないだろう。授業だけでなく、自由な相互の交流を可能とし、生き生きとした学生生活を可能とする環境への要望はますます大きくなっていると考えられる。そのためには、現在行われている副学長主催の課外活動との運動施設利用調整会議を発展させ、運動施設に関連する関係各署が連携し、長期的視野のもと問題や課題を共有するための協議会等の開催を求めていくことは重要であろう。短い時間であるが、今回、学生支援課と連携の必要性を確認できたことは、今後につながる成果であったといえるだろう。

また昨年度概算要求に「復活」した体育館改修が、本年度も学内における要求項目としてあげられた。残念ながら、前年同様に本採択には到らなかったが、運動文化をいっそう充実させる授業環境、施設の拡充、さらには既述したようなキャンパスの充実のためにも、今後いっそう強く働きかけることが肝要であろう。

施設運営をめぐる状況が根本的にはほとんど改善されない中、施設整備を行ってくれる作業員の坂口氏には、大きく謝意を表したい。とりわけ、教員のアンケートにも多く書かれていたが、屋外のバレーボールコート、テニスコートが、天候に大きく左右されず、常に最良の状態で授業を行えるのは、坂口氏が日常的にこまめに整備を行ってくれているからである。一年ごとに業者が変更されるが、このような熱意と力量を持った人物が今後も雇用されることを心から期待したい。

(坂 なつこ)

． 2006 年度の教育活動の成果と課題

1 ．カリキュラム編成と体制

< 体制 >

- ・ 早川教授が 2006 年 3 月をもって定年退任され、専任 7 人の体制となった。
- ・ 非常勤講師は、10 名。担当コマ総数は 20.0 で、3.5 減である (2005 年度は 10 名、23.5 コマ)。運動文化科目開講コマ数(教養ゼミ含む)に占める非常勤担当コマの割合は、約 44.9 % である。

< 開講コマ：全学共通教育 >

全学共通教育科目における運動文化科目の開講総コマ数は、通年コマに換算して 44.5 コマである。

	2006年度		2005年度	
全学共通教育開講コマ	44.5	通年コマ	50.5	通年コマ
・方法（療育コース）	30	(1) 通年コマ	31	(1) 通年コマ
・方法	19	半年コマ	25	半年コマ
・健康・スポーツ科学	7	半年コマ	8	半年コマ
・教養ゼミ	3	半年コマ	6	半年コマ

< スポーツ方法：種目別開講コマ数 >

	スポーツ方法 = 通年		スポーツ方法 = 半年	
	2006年度	(2005年度)	2006年度	(2005年度)
テニス	9	9	5	7
バスケットボール	2	2	2	2
バドミントン	6	6	3	3
サッカー	3	4	2	2
バレーボール	1	2	1	1
軟式野球	0	0	1	1
ソフトボール	2	2	0	0
ジャズダンス	2	1	0	2
フライングディスク	1	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	-	-
剣道	1	1	0	2
フラッグフットボール	1	1	-	-
陸上	-	-	0	0
器械体操	-	-	1	1
ゴルフ	-	-	2	2
療育コース	1	1	-	-
合計	30	31	19	25

2. 2006年度の教育活動の成果と課題

(1) スポーツ方法

2006年度のスポーツ方法の全体的特徴

毎年度末に実施している「スポーツ方法に関する調査」の結果によると、2006年度のスポーツ方法全体の「満足度」(「大変満足」と「まあ満足」と答えた者を合計した割合)は2005年度に比べて5%ポイントを上げている(74.1%[2005年度] 79.1%[2006年度]:巻末資料3-1「スポーツ方法に関するアンケート」参照)。例年、スポーツ方法の満足度は高いのであるが、今年度も同様な傾向が示されているといえる。さらには、「やや不満」「大変不満」と答

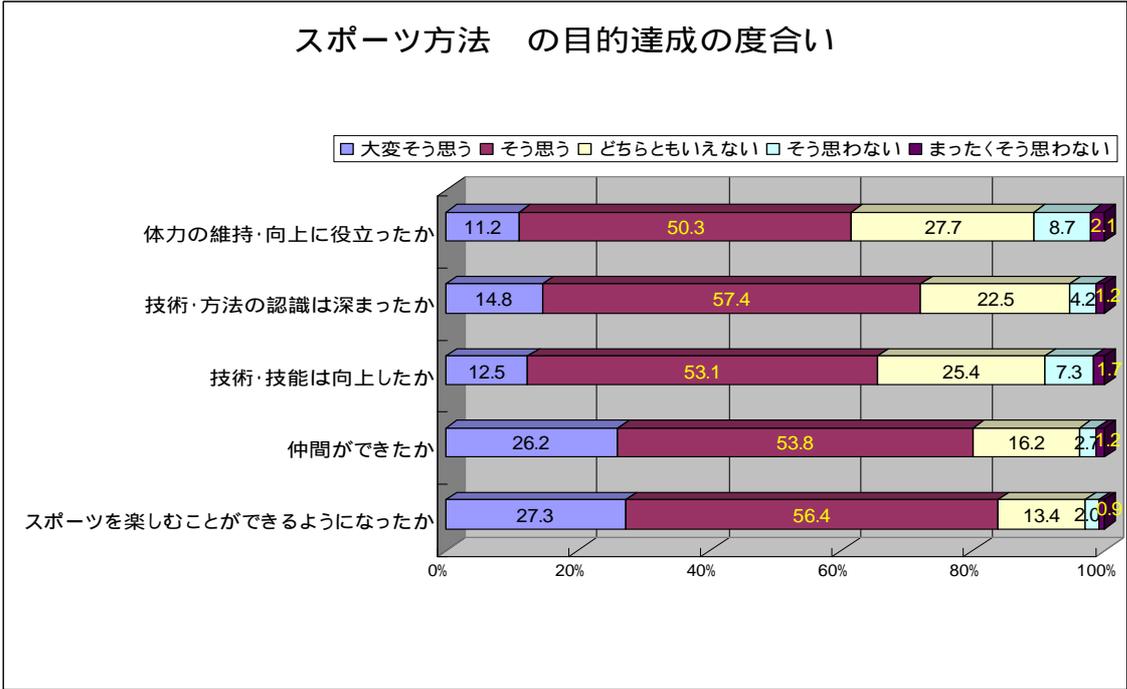
えている受講生は合わせて 3.2% (2005 年度: 4.6%) と、調査開始 (1999 年度) から最も低い割合となっている。これらを総合すると、スポーツ方法 の授業では、全体的に学生を満足させるに十分な質の高い授業が展開されていると考えられる。われわれは、高い「満足度」(低い「不満度」)に自信をもつと同時に、引き続き受講生の学習がより促進されるようなスポーツ方法 の授業をつくっていくための努力をしていかなければならないであろう。

さて、スポーツ方法 の目的は「()基礎的な体力の養成」と「()スポーツを行い、楽しむ上での基礎的能力(技術認識、練習方法、技術習得など)の養成」、「()グループを通しての人間関係の形成」である(『学修ガイドブック』より)。2005 年度から「スポーツ方法に関するアンケート」の中にこれらのスポーツ方法 の目的が達成されたかどうかを問う質問項目を設けている。

それによるとスポーツ方法 の授業が「体力の維持・向上」に役だったと答えている者は 61.5% (「大変そう思う」11.2% + 「そう思う」50.3%) にものぼる(下図参照)。週に 1 度の運動によって彼ら・彼女らの体力が実際に維持・向上しているかについては疑問が残る点ではあるが、スポーツ方法 の授業が彼ら・彼女らの運動欲求を充足させるための貴重な時間になっているということは事実であろう。しかしながら、スポーツ方法 の授業は、単に、受講生の身体を動かすことのみ重点をおいたものではないし、また、それだけでは受講生は満足しないであろう。それは、自由記述の「不満な点」に「もう少し練習時間を増やして欲しかった」という意見や「技術的な指導をもっとして欲しかった」などの意見が提出されていることから理解できる。受講生は、「うまく」なりたがっているのである。その点で、「技術・方法の認識の深まり」「技術・技能の向上」について、それぞれ 72.2%、65.6%の者が肯定しているということは一定の評価ができるが、1 年の時間をかけて自らの認識の深まりや技術・技能の成長を実感できない者が 3 割ほどいるという事態はやや問題であるともいえる。この点に関して、「認識の深まり」は経験者と初心者では異なるとも考えられるので、より詳細な分析を行い、実践交流会などで検討をしていくべきであろう。

「仲間ができたか」という質問に対しては 78.3%の者が「大変そう思う」「そう思う」と回答している。自由記述の「満足した点」にも「みんな仲良くなった」「仲のよい友達ができた」などの意見が多く出されている。多くの授業でグループでの学習が行われているが、これらの成果がこの数値に表れているのだろう。しかしながら、自由記述の「不満な点」に、「班以外の人と仲良くなれなかった」「1年間同じグループだった」という意見をあげている者もいるので、グループ間の交流などを工夫する必要があるとも考えられる(工夫した事例については後述部分にて紹介する)。

そして、総合的にとらえて「スポーツを(受講したスポーツ種目を)楽しむことができるようになったか」という問いに対して、83.7%の者が「大変そう思う」「そう思う」と答えている。われわれは、主体的に自己の能力を伸ばし、仲間と教え合い・学び合いができ、総じて、スポーツを楽しむことのできる主体の育成をめざしている。このアンケート結果からは、それらの目標をある程度は達成できていると評価できるのではないか。もちろん、これからもたゆまず努力をしていかなければならないのだが。以下に、年度末に提出された授業担当教員からのアンケートをもとに、それぞれの授業での工夫・努力についてみていきたい。



授業の内容と方法

<グループ学習に関する工夫>

スポーツ方法 のほとんどの授業においてはグループで自主的に練習メニューをつくって学習をすすめていくという方法がとられている（個人種目とチーム種目にかかわらず）が、グループ学習はそれぞれの学習集団の課題に応じた進度と方法で学習が促進されるという半面、うまくグループが作れない場合、学習が阻害される危険性もある。したがって、それぞれの授業担当者は、いかに学習する雰囲気をもったグループをつくっていくかについて苦心をしている。

たとえば、藤田のテニスの授業では「テニスおよびスポーツ経験調査をもとに、ほぼ等質グループになるように6班編成としてグループ単位の練習形式を」ととっている。そして高津のテニスの授業でも「初心者と経験者、できる者とできない者が1つのグループを構成し、学習経験を積み重ねながら、テニスという文化について考える授業をめざし」としている。このような「異質な者同士」の「等質」なグループをつくるように工夫するのは、一つにはグループ間の競争的刺激が学習を促進するためであり、最初の段階から技術や知識に差がある場合にはそれが阻害されるからである。またもう一つの重要なポイントは、異質な者同士を一つのグループにすることにより、グループ内において構成員同士の「教え合い・学び合い」が促進されるというところにある。スポーツ方法 の授業ではスポーツを通して「仲間をつくること」や「集団を運営していく能力」などの獲得を目指しているが、グループ学習はそれを達成することに効果のある学習形態であると考えられるのである。しかしながら、グループでの学習はそのようなメリットをもつ反面、いくつかの問題点ももっている。

まず、種目によっては、競技を行うチームの構成人数が多いため、工夫を要するものがある。たとえば高津のサッカーでは「1グループ15人という多人数」になるため、「夏学期はミニサッカー（少人数グループ）での活動を中心にし、冬学期は2つのグループを1チームに統合して計2チームで運営する方式を採用」とするという工夫をこらしている。やはり小集団の方が互いのコミュニケーションが図られるため、グループ作りの時期には高津の採用したような工夫

が必要となると考えられる。

また、「経験者」の存在も、彼ら・彼女らを中心に学習が促進される一方で、ある場面では学習阻害の要因になることもある。新村はバドミントンの授業について、経験者が練習をリードすることによって「クラブ活動的な練習活動になりがちで、他のメンバーが、必ずしも理論的な理解が深まらず、どこか『やらされている』ような雰囲気が生れてしまう事が多かった」ということを指摘している。坂もバスケットボールの授業について「バドミントン同様にリーダーシップの発揮の仕方とそれを受け止めるメンバーとの関係がスムーズではなかったようだ。バスケットボール自体は経験者が多く、非常にレベルの高いものだったが、それだけにバスケットだけをやりにくる、という態度のものが多く、バスケットボール集団をマネジメントするという意識に欠けていた」と今年度の授業を総括している。坂が指摘するように、スポーツ種目の技術や知識を多く持っている者がリーダーシップを発揮するとは限らないのである。

年間を通してグループを固定する授業には、それぞれのグループの構成員同士の結びつきを強化する一方で、他のグループのメンバーとのコミュニケーションがうまく回れないという問題点も存在する（学生の感想：高津・テニス「ただひとつ残念に感じるのは、対抗試合くらいしかほかのグループの人とかかわることができなかつた点です。」）これらの問題を解決するために、鬼丸は一時的にグループを解体する授業を行っている。以下、少し長くなるが、鬼丸の工夫とその感想などを教員に対するアンケートより引用する。

「従来の如くグループ学習中心の授業運営であったが、今年は夏期授業の終わりに一日だけグループを解体し、フォアハンド、バックハンド、サーブの3グループにクラスを分け、各自練習したいグループに入って、1時間そのショットのみを練習するという試みを行ってみた。その理由は、この時期技術的な問題を各自抱えだし、どうしてもバックがうまくいかない、サーブがうまく打てないとの問題を生まれるので、ゲーム中心の授業を展開する前に、技術的な課題を十分時間をとって解決する（あるいはその糸口を見つける）時間をとりたかつたためと、グループ学習が一応軌道に乗り、ある種の慣れが生じる時期なので、グループ対抗のゲームに入る前に一度グループを離れ、他のグループのメンバーとの交流を行う時間がほしかつたためである。

各グループの運営は前週に経験者に頼んでおき、各グループ2名以上は経験者がついて指導してもらおうようにした。当日は出席した学生に（出席をとりつつ）希望のグループを聞いて3グループに分かれて学生主導の授業（経験者には基本的な練習計画は提案したが、実際の運営は経験者に委任した）を行ってもらった。

この授業に対する学生の評価は概ね好評で、日頃抱えていた技術的問題を解決できてよかった、集中して練習できてよかった、他のグループの人と練習できて良かったという声が多かつた。問題点としては、（これは指導を頼んだ経験者の声に多かつたが）1時間何を教えていいのかわからない、時間がもたない、1時間1技術ではなくて、例えばバックが終わったらサーブに移るというシステムにしてはどうかという指摘があつた。これは経験者に授業を丸投げするのではなく、ある程度（特に教えた経験の少ない経験者には）講師が経験者に詳しい授業計画を提案し、授業運営をサポートする必要があることを示唆しているといえる。また前週に指導を依頼した経験者の学生が欠席したり、授業当日開始時のグループ分けが意外と時間がかかつたりした問題もあつた。準備にもう少し工夫が必要と感じられた。とはいえ、積極的な部分

も多く見受けられたので、工夫を加えつつ来年度以降も継続していこうと考えている。」(鬼丸・テニス)

グループづくりの成否は授業全体の成否を決定づける大きな要因となる。しかしながら、これはグループに集まる受講生の技術レベルや性格に左右されることが多く、こうすれば必ず成功するという方法がなかなか見つからないのも事実である。実践交流会などで各教員の経験を共有する機会をもつ必要があるであろう。

また、グループ学習には、技術レベルの差異による不満が、経験者・初心者の両方から表明されることもある。経験者の不満は「(グループ内の初心者に)教えてばかりいて、自分のレベルにあった技術習得ができない」といったものであり、初心者の不満は「経験者ばかりが試合の中心になり、自分たちが活躍できない」というものである。このような場合には、初心者と経験者のグループが分裂したり、グループ替えの希望が出されたりする。そうした際には、鬼丸の上記のような工夫や一時的にグループを解体する授業、グループメンバーを入れ替えるような授業の工夫が検討されるべきである。

グループでの学習に関連して、今年度も授業担当者から欠席や遅刻などへの苦言が提出されている(藤田・テニス, 内海・ソフトボール, 坂・バスケットボール)。グループでの学習をすすめていく授業において出席率の悪さは、当該受講生の学習が遅れるということに完結せず、同じグループのメンバーの学習を阻害することをも意味する。引き続き、実践交流会などで各授業の出席率向上のための取り組みを共有していく必要があるであろう。

グループでの学習を展開していく授業は難しい。しかしながら、成功すればその効果も大きなものとなる。以下にグループの「良い雰囲気」が学習を促進したとの報告を紹介する。

「どのチームも、キャプテンとメンバーとの関係が非常によく、熱心な学習が展開されたと考えている。」(新村・バレーボール)

「There has been a good collective atmosphere, which was reflected also during practice and playing time. Students cheered up each other well and a lot of laughing occurred.」(ポルスター・バスケ)

「人が楽しそうに踊っていると、見ている人もつられて笑ってしまうし、つられて楽しくなってしまうんだなというのを肌で実感しました。」(学生の感想：白河・ジャズダンス)

「留学生4人(1人は冬欠席多かったが)が極めて積極的にクラス全体を盛り上げた。クラスの技術向上はもう一つのクラスに比べて明らかに認められた。」(上野・バドミントン)

「このクラスでは女子8名で全ての班に2人ずつ入り、ミーティングだけでなく練習・ゲームでも班活動を引っ張った。やる気のない男子もそれに巻き込まれ、私のほうから注意をしなくても自発的に動くようになっていた。」(上野・バドミントン)

「班で仲良くすればするほど、出席率は高まっていくのだ。」(学生の感想：高津・テニス)

<学生の主体的学習に対するサポート>

グループでの学習は、それぞれのグループ(チーム)の課題に即した練習を自分たちで試行錯誤しながら進められる。このような授業では以下の尾崎の指摘のようなジレンマを教師は抱えることになる。

「自主的な練習計画の策定は、教師から一方的に与えられるプログラムと違って、自分たちが

考えて自由にできる点でよかったと同時に、技術を理解する上でも有益であったとの評価が目立った。最後の点に関しては、『もう少し先生から教えてもらいたかった』『初心者には練習メニューの提示をもう少し多くして欲しかった』という趣旨の、教師側からの『指導』の機会・量をもう少し増やすことへの希望も出されている。実際には、授業中などに個別に声かけをしたりしながら適宜アドバイスをしたり、練習方法の紹介を口頭で行ってきたりしているが、すべての学生に行き渡っていないことも事実である。学生の『自主性・自発性、自律的計画づくり』と『教師の関わり方』のコラボレーションの『落とし所』がどの辺にあるのか。現状としては『及第点ではあるが、まだまだ改善の余地がある』というところか。」(尾崎・テニス)

教員の側から「ああしなさい、こうしなさい」という指示を出すばかりでは、学生の主体性が奪われ、技術や練習方法への認識の深まりは期待できない。しかしながら、あまりにも学生の主体性に任せきっても同様に認識の深まりは阻害される。これらのバランスをどのようにとるのが、そこが難しい点なのである。

従来は授業中に尾崎が行っているように、教員が学生の課題に応じて指導をしたり、課題を克服するために参考となるテキストなどを紹介したりしている。今後はポルスターがバスケットボールとサッカーで試みた、Web上で技術認識をテストできる教材を利用することや、岡本がフライングディスクで試みようとしているような視聴覚教材も学生の主体的な学習をサポートするには有効となるかもしれない(以下参照)。

「For the first time in this semester as part of evaluating students a Soccer Internet Knowledge Test has been introduced.」(ポルスター・サッカー)

「グループノートを使用しても、経験者が少ないアルティメットでは練習方法のバリエーションがどうしても乏しいままで年度末を迎えてしまうということになりがちである。授業の際に工夫した方法を教えるようにしているのであるが、どうしても冒険を試みようとはせずに、定型の練習方法の枠を超えられないグループが多い。そこで、現在、スポーツ方法の受講生に協力してもらって、練習方法の説明や動画をPCで見ることのできる教材を作成している(将来的にはWebに公開する予定)。このような教材を貸し出すことによって自習を促し、多少は上記の問題が解決するのではないかと考えている。」(岡本・フライングディスク)

<ルール改正に対する取り組み>

バドミントンでは今年度の途中で公式ルールの変更があり、上野と新村の授業において、新ルールを導入した授業が展開された。両授業ともに特に混乱はなかったようであるが、頻繁にはない貴重な機会を利用して、新村は「スポーツやルールと商業主義の問題」なども扱い、スポーツのルールへ認識を深める授業を工夫している。

<TAによるアシスト>

2006年度のスポーツ方法では、昨年度に引き続き、唯一、岡本のスポーツフィットネスの授業でティーチング・アシスタント(TA)が採用された。この授業では毎回授業の冒頭に体重や体脂肪率、血圧などの測定を行うが、TAが採用されたことにより、これらの機材の準備、片づけがスムーズに行われ、担当教員が授業に集中できる状況が作り出されている。また、スポーツフィットネスでは冬学期に健康法・トレーニング法のグループワークを実施させるが、

TA がディスカッションに加わることによって、受講生の学習が促進された。今後は他の授業においても TA を採用し、授業の充実が図られるべきであろう。

療育コース（担当：尾崎）

受講者は 1 名。

夏学期は、まず、自分の身体の状態を把握すること、適正な運動強度をつかむこと、そして、身体をほぐすこと、などをねらいとして、自分の身体の状態にあったストレッチやサーキット・トレーニングの構成を考え、その実施を授業の入口とした。

スポーツ種目としては、ダーツを実施した。NHK 教育 TV でのダーツのシリーズ番組を教材とし、ビデオ撮影で投球（矢）フォームをチェックするなど、多面的な取り組みをした。

冬学期は、身体の状態が改善されたこともあり、協議の結果、テニスを実施した（テニスは高校の授業の際に少しかじった程度）。

これらの内容について、いずれも意欲関心を持続させながら取り組むことができた。とくに、テニスについては、基礎技術の習得の度合いが早く、本人もそれなりの手応えを得ていたようである。

（岡本 純也）

（２）スポーツ方法

受講者の傾向と特徴

2006 年度のスポーツ方法 全体（19 コマ開講）の受講生は 450 名であった。昨年度は 25 コマ開講で 537 人の受講生を集めているので絶対数としては減少しているが、1 コマあたりの平均人数で見ると、21.48 人 23.68 人へと数値を上げている。開講コマが昨年度から 6 コマ減少していることを考えると受講生の絶対数が減少したことは問題ではないが、引き続き定員に対して大幅に少ない人数しか集まらない授業などは、種目や開講時限を検討するなどの工夫をしていかなければならないであろう。

年度末の「スポーツ方法 に関するアンケート」（巻末資料 3 - 2 参照）の回答結果を参考にすると、4 年生の受講比率（回答比率）が伸びていることが分かる（2005 年度：27.5% 2006 年度：41.4%）。また、反復履修者の割合（回答者における）も伸びている（2005 年度：45.3% 2006 年度：55.5%）。女子学生の受講（回答）も減少している（2005 年度：23.3% 2006 年度：16.7%）ことも考え合わせると、「スポーツの愛好者は喜んで受講し、初心者は臆して受講しない」という傾向が強まっているとも考えられる。この点は従来からスポーツ方法 の授業ではみられた傾向であるが、興味をもって受講希望をもった者が臆して受講できないということは問題であるので、今後は、レベル別の授業（テニスなど）ではその主旨を強調するとともに、それ以外の授業では初心者に開かれているということを明確にシラバスに記すなどの工夫が必要であろう。

授業担当者のアンケートからは、登録はしているものの 1 回も出席しない者や数回出席した後に出てこなくなる者が増えていることを問題としてあげる意見が散見された。スポーツ方法 では、各学期はじめに履修のための抽選を行っているのであるから、登録できた者は抽選に

落ちた者がいることを自覚して参加するようにしてほしいものである。今後、このような無責任な受講生を減らすための取り組みは、受講生から提出される不満の第1位である「単位数を増やして欲しい」の解決策としての「演習化(半期2単位化)」の議論と合わせて検討していく必要がある。

授業の内容と方法

スポーツ方法 の授業は、例年サークルなどからの参加者(経験者)が多く、高度なレベルの学習の場となる(上野,坂:バドミントン、尾崎:テニスなど)。このことは、スポーツ方法の授業において欲求不満を感じていた経験者に達成感・充実感をもたらすことになる一方で、初心者が最初から臆して受講しなかったり、授業の中で疎外感を感じてしまうということになる傾向をももつ。他方、経験者が初心者を早く高いレベルまで引き上げようとし、初心者がそれに応えようとすることによって学習が促進されるという効果も期待される(坂:バドミントン,岡本:フライングディスク)。坂が指摘するように、初心者と経験者、両者の要望を満たすようなプログラムの開発と同時にレベル別の授業を設定し、授業の最初の段階での受講生の振り分けをするなどの工夫が必要であると考えられる。(岡本 純也)

以下は2006年度のそれぞれの授業担当者から示された授業概要である。

藤田和也

ゴルフ:木2夏・冬

夏学期は初心者コースとして開講した。前半の3分の1はスウイングの基礎練習、中盤の3分の1はプラスチックボール、バードゴルフ、実球によるショット練習、後半の3分の1は民間のゴルフ練習場でのショット練習を行った。スウイングでは、スウイング軌道、スウイングプレーン、スウイング軸などを意識させ、スウイングバランスと腰の回転・腕の振り・手首のコックの連動によるヘッドスピードなどの要領を会得させることを目標とした。

冬学期は経験者コースとして開講した。受講者の半数近くは夏学期からの連続受講者であった。初心者も含まれていたため、最初の3回くらいはスウイングの基礎練習を主体とし、集中的に初心者のスウイングづくりをし、経験者にはフォームチェックを主体に行った。ショット練習への移行を少し早めにし、アプローチショット、バンカーショット、パッティングなども折り込んだ練習をした。また、民間ゴルフ練習場での授業回数を少し多く(4回)して、フルスウイングによる打球方向や飛距離を確認しながらスウイング調整をする練習法を多くした。授業期間終了後、エキストラで、希望者を連れて青梅のショートコースを経験させた。

受講者の感想では、途中で折り込むバードゴルフコンペと民間ゴルフ練習場での練習が好評であった。ただ、相変わらず途中リタイアする学生が少なくない(夏=3/20名、冬=8/24名)のが残念である。成績分布は以下のとおり。

(夏) A=8 B=2 C=2 D=2 F=5)

(冬) A=6 B=4 C=0 D=1 F=12)

高津勝

テニス：水2夏

・授業概要

(1)初級から中級への導入というレベルを想定して授業を展開しようとした。課題として、「自分およびグループの技術やゲーム展開の特徴、課題を分析できるようになる。」「練習計画を作成し、それをグループで実施できるようになる。」ことをめざした。ただし、若干の者をのぞき、ほとんどがサークル経験者で、技術レベルでは中級以上の者が多数を占めた。

(2)初心者に近い者もあり、技能差を憂慮したが、経験者が協力的で円滑な授業ができた。

(3)「自分およびグループの技術やゲーム展開の特徴、課題を分析できるようになる。」という点については、経験者(とくに上級者)のサポートが大であった。ただし、「練習計画を作成し、それをグループで実施できるようになる。」については、成功しなかった。グループ別の活動はそれほど追求せず、クラス全体が共通の課題を設定して班別で学習し、1コマの後半部分はゲームをする、とう形式に変更したからである。

・学生の反応

(1)経験者(ほとんどサークル員)が協力的で、授業をサポートしてくれた。

(2)教師としては、受講生と一緒にやりながら自分も練習する、といった具合で、どれほどインパクトを与えたか、疑問。

・評価

出席点とレポート(自己及びグループの技術分析)を中心に評価。

サッカー：火2冬

・授業概要

受講登録者が3名ほどであったため、学生と相談してゴルフに変更。あとから参加した者を含め、結局、7名が参加。ケージに向かってピッチングと7番アイアンの練習をした。後半は、ショートコースに行くことを前提にアプローチの練習を加えた。授業終了後(1月24日)、7名で青梅のショートコースを廻り、初歩的なゴルフ経験をした。ワールドカップの開催年に、なぜサッカーの受講者が少ないのか、不明。

・学生の反応

受講者は、将来、ゴルフを経験することを想定して参加しているため、熱心に練習に取り組んでいた。一度、受講生の希望でサッカーをやることにしたが、そのときの出席者はわずか2名で、それ以降は、ゴルフのみとした。

・評価

出席点とレポート(テーマ=大学における体育の役割)

内海和雄

バレーボール：水2夏

当初の登録者が2名しかおらず、話し合いの結果、他の種目に移って貰うことになり、休講とした。

軟式野球：火2冬

成績	A	B	C	D	F	合計
人数	2	3	2	1	11	19

当初は2チームが編成でき、対抗戦もできたが、次第に欠席が増え、最終段階では7~8人が限度であった。4年生の選択が多く、次第に億劫になるようである。

欠席が多くなった段階で、普段は余りできない基礎練習を行ったが、これが野球サークルに加入している学生にも好評であった。彼らも余りこうした基礎練習はしないということであった。それにしても4年生が最後までしっかりと出席するような授業作りには一層の改善が必要である。

上野卓郎

バドミントン：木3夏・冬

夏：35名（男31、女4）、1年1人（全欠）、2年5、3年15、4年14（うち全欠5）。成績はA11、B8、C4、D5、F7。13回の授業。履修登録しながら全欠6人がいた。定員より3名多く受け入れたが、この全欠のため実質29名だった。3、4年が主力で、特に4年に技術的に高いレベルの者がいて活気があった。2年がやや遠慮がちだった。

冬：29名（男24、女5）、単位外3人（4年）が常時参加。2年5、3年11、4年13（うち全欠7）。成績はA9、B7、C4、D0、F9。11回の授業。夏と同様、全欠7人がいた。今回は定員割れ（3名マイナス）だったので実質22名プラス単位外3名。夏も履修した者8人（2年1、3年3、4年4）、去年も履修が3年2人、つまり10人が継続履修者で、彼らが最初からフルに働いた。夏と比べて2年が積極的に3、4年と交わった。欠席の多い者は少なく、単位外3人と3年女子（大半が継続者）が全体の雰囲気を高めた。サークルとゼミの交流の様相も見せた。

* 夏冬共通して4年の履修登録しながら全欠する者（夏5、冬7）の問題を検討する必要がある。もう一つ、比率的に2年の受講が少ないのはなぜだろうか。

尾崎正峰

器械体操：火2夏

受講生は実質3名と例年になく少なかった。

受講生が少ないため教師が補助をすることがまめにできるので、各技の導入からある程度までの練習の実施はスムーズにいったと思われる。ただ、少人数ゆえの「のんびりさ」のため最後の「詰め」が甘くなり、演技水準を全体的にもう少しあげることができたのではないかという反省もある。

テニス：火2冬

「初心者・初級者を想定している」と講義要綱には明記してあるが、従来からと同じく経験者、とくにサークルに所属する学生の受講が目立った（25名の登録の中で、15名程度）。

もう一つの特徴として、抽選を通った学生であっても1回も出席しない、あるいは、1、2回程度で来なくなってしまいう学生も目立った（4年生を中心に10名弱）。抽選に落ちたために受講できない学生もそれなりの数になるであろうから、何かよい方策はないものか？（スポー

ツ方法 全体の問題ともいえる)

教師は、基本的に「初心者・初級者」を中心に指導を行った。ただし、まったくの「初心者」は少なかったので(「方法 でテニスをとった」等)、1ヶ月を過ぎた時点でゲーム中心のメニューとした。

毎回、個人別のカード(記入票)を配布し、その日に実施した練習・ゲーム内容、自分なりの評価、今後の課題等について記入することとした。これらは、最終レポート作成の基礎とした。

岡本純也

フライングディスク：金2夏・冬

夏学期 24 名受講、冬学期 36 名受講、うち夏冬受講者 16 名であった。年々、リピート受講者が増え、その中からアルティメットのサークルをつくる者も出現した。サークルのメンバーは夏休み中に公式戦に1度出場し、1勝もできなかったが、戦略や練習方法などを外で学び、授業の場へそれを持ち込むことになった。そのことにより、冬学期には例年になくレベルの高い練習、ゲームが展開されることになった。サークルに所属するメンバー全員が私の授業で初めてアルティメット競技に触れたことを考えると、ここまで成長してくれたことを非常にうれしく思う。同時に、中心的メンバーが4年生であり、来年度には状況が変わってしまうであろうことが残念でならない。ここまでの成果をできるだけ来年度へ引き継ぐために考えたのが、上記(スポーツ方法：フライングディスク)の教材作りである。この教材が完成すれば、方法の授業でも活用できるとともに、方法においても、初心者の自習に利用できるだろう。うまく活用できれば、授業の中の成果が年々蓄積されていくことも期待できる。

坂なつこ

バスケットボール：水1夏

特に例年からの違いはなかった。相変わらず経験者が多く(スポーツ方法常連も含め)、技術レベルの高いものとなった。一方で、未経験者との差が大きく、どちらの要望も満たすようなプログラムの開発が必要だと感じた。

バドミントン：水1冬

こちらでもクラブ経験者が三分の一程度おり、うまく全体をリードしてくれた。単位の振り逃げが多いのが問題である。また、4年生が研修などで恒常的に抜けることが多かった。

Polster

サッカー：火2夏

Unfortunately a very small number (4) of participants enrolled in that class. However, the class was held; - practicing several soccer skills: passing and kicking techniques. The level of soccer skills was high. Sometimes students asked friends to join the class. In that case small group soccer towards cones serve as goals was exercised. These students also have been quizzed about the World Cup Soccer tournament in Germany.

For the first time in this semester as part of evaluating students a Soccer Internet

Knowledge Test has been introduced.

バスケットボール：火2冬

A Basketball class with many skillful players. Even so, - some new elements of Basketball teaching have been introduced, what was welcomed by the students. Basketball games were conducted as team work very well. All players - also those of fewer skills - were integrated in the game.

For the first time in this semester as part of evaluating students a Basketball Internet Knowledge Test has been introduced.

鬼丸正明

テニス：木3夏

受講者 30 名。不合格者 3 名。初心者は全員合格。降雨や休講のため、3 回実技ができなかったが、ダブルスのゲームまで実施することができた。初心者と初級、中上級の学生との交流もスムーズに行き、中上級者が初心者に教え、一緒にゲームを楽しむことができていたように思われる。

柴崎涼一

テニス：金1夏・冬

夏冬を通じてドロップアウトした学生が多かったのは少し残念だが、最後まで参加した者は積極的にやってくれた。特にテニスサークルに所属していないいわゆる素人の学生たちに基礎練習やゲームを通してテニスの楽しさを伝えることができたように思う。

(3) スポーツ科学・健康科学

今年度は、夏学期 3、冬学期 4、合わせて 7 つの講義を開講した。昨年度と比較して 1 つ減少した。そのことと関連して、昨年度まで夏・冬リピート開講していた「ヒューマンセクソロジー」を、夏学期開講に限定したことを記録にとどめておく必要がある。

今年度開講された授業の内訳を示せば、別表のようになる。総登録者数 1,441 名、うち、単位取得者 1,241 名。登録者の 86% が単位を取得し、そのうち、「A」評価が 45% を占める。ただし、「A」取得者の比率は、授業によって大きく異なる（最少、14%。最多、63%）。成績評価と同様、授業登録者数も、授業によって大きく異なるが（最少、19 名。最多、427 名）、懸案の多人数教育問題は、受講希望者が教室の定員をオーバーした場合、抽選を行うなどの方策を講じることによって、改善の方向に向かっている。

2004 年度のスポーツ科学・健康科学系開講授業の総登録者数は、2,060 名であった。この年度と比較して、本年度は約 600 名減少した。その理由は、「ヒューマンセクソロジー」の 1 コマ減と、多人数講義「スポーツと映像文化」に受講者数制限を導入したことにある。他の授業の履修者総数に変化はなく、それらの授業の履修者は、むしろ微増傾向にある。

今年度も、授業の改善をめざして、さまざまな創意工夫がなされた。W杯など、当該年度の

開催されるスポーツイベントの話題を織り込んだ内容構成により、受講生の興味関心を喚起しようとする授業（坂）、ゼミ形式の発表・討論をもとに「論集」を作成し、成果を全体で確認しようとする授業（上野）、現場に携わる外部講師を招き、受講生にトピカルで実践的な話題を提供する授業（内海）、心拍数の実測などで生体反応を体験的に確認し、実習と講義を結びつけようとする授業（渡辺）、最後の講義を授業全体の総括にあて、講義内容を総体として受講者全員で再確認する「最終授業」の試み（鬼丸）、講義とグループワークを併用し、グループ別の期末プレゼンテーションをもって完結させようとする授業（高津）などなど。すべての担当者が、なんらかのかたちで、スポーツ科学・健康科学の授業の改善に取り組んでいる。そうした授業実践・授業展開の背後には、受講生の興味関心を大切にし、講義への主体的な参加を促しながら、より総合的・体系的な認識を育てようとする担当者の意図が存在する。

だが、問題や課題がないわけではない。そこには、身近で具体的なスポーツ情報を求める受講生の関心と社会的な視点をどう接合するか、といった問題（坂）、講義の内容と学生のグループ活動との乖離をどう克服するか、という問題（高津）があり、さらに、多くのレポートが「インターネットから丸写し」であるという事態（坂）にも直面している。また、外部講師の謝礼システムが存在しない（内海）という問題もある。

受講者数の過多とかかわって、今年度は2つの試みがなされた。1つは、「スポーツと映像文化」で、受講者数を限定するためにオリエンテーションで抽選を行ったケースである（ただし、実際には、オリエンテーションに参加せず、したがって、抽選もしていないのに履修登録した学生が多かった。なお、抽選は2005年度から実施。）。もう1つは、「スポーツと権利」で、教室の収容人数（200名）を大きく超える学生がオリエンテーションに参加したため、受講生を2、4年生に限定し、来年度に2、4年生限定の授業を開講することをオリエンテーション参加者に確約したケースである。そうした事態を想定し、受講希望者が多い場合の対応策について、検討する必要がある。

なお、成績評価の授業ごとのアンバランスについても、検討の余地があり、ここ数年来、「スポーツトレーニング」の授業が未開講になっており、スポーツ科学・健康科学の授業内容の構成上、アンバランスをきたしている。この点にも、引き続き留意しておく必要がある。

（高津 勝）

以下、各担当者からの報告を掲載する。

現代スポーツ論（坂なつこ 金4：夏）

受講者：130名程度（登録人数：255名）

グローバルゼッションをテーマに行った。オリンピック、W杯などスポーツイベントが多く、トピックスが散漫になってしまった。学生の要求はより具体的なスポーツ情報にあるが、それらを社会科学的視点につなげられるような構成がなかなかできなかった。

もっとも苦労したのは、レポート課題についてであった。多くの学生がインターネットから丸写ししてくるケースが発覚し、閉口した。課題の設定の仕方に工夫をするとともに、レポートの書き方などの指導が必要であると感じた。

国際スポーツ運動（上野卓郎 火2冬）

受講者：履修登録 19 名、うち全欠 9、1 回出席のみ 4、この 13 名は F。常時出席かつ論文提出 6 名（A4、B2）。提出論文をまとめた『国際スポーツ運動論集 2006』の「まえがき」の一部を引用する。「6 人はそれぞれ問題意識をもって授業にのぞみ、ゼミ形式の発表・討論をすすめていった。11 月の 2 週にわたるテーマ研究の中間発表で、最終レポートに向けた課題を相互に確認し、各自論点を絞って研究を深めていった。私の方からは、国際スポーツ運動史の発掘資料や映像を紹介する講義を行い、この研究分野への関心を誘いつつ、受講生の研究をサポートすることに重点を置いた。」彼らの論文タイトルは以下の通り。

1．オリンピックボイコットから見るスポーツと政治（法 1） 2．オリンピック種目から近代オリンピックを考察する（社 1） 3．バレーボールビジネスの未来（社 2） 4．大相撲、ひいては日本スポーツ界における外国人選手について（経 3） 5．柔道の国際化と競技性の変化（法 4） 6．ドーピング問題解決策（商 4）

スポーツと権利（内海和雄 火3：冬）

受講者：登録 294 名

教室が 200 名の所、オリエンテーションに数百人が来たために、2、4 年生に限定し、来年度同じく 2、4 年生を中心に開講することを約束した。

それでも 1 年生 5、3 年生 9、合計 14 名が登録した。

従って、受講資格者は 280 名。

成績は次の通り。受講は 2 年生が 65%、4 年生が 35%。

持ち込み自由にしたことから、全体に成績は高かった。

成績は出席点とテスト点を総合した。F は 4 年生が圧倒的に多く、4 年生の登録者の 1/3 であった。

	2 年	4 年	合計	%
A	116	31	147	52.5%
B	35	20	55	19.6%
C	18	12	30	10.7%
D	4	3	7	2.5%
F	8	33	41	14.6%
合計	181	99	280	

受講生は、テーマ「プロ・スポーツ論」に対して、社会科学的に初めて聞くことができたと、全体的に好意的であった。これは授業評価と対照する必要がある。

途中、「セカンド・キャリア」問題では浦和レッズの上代圭子氏に講義をお願いしたが、学生には好評であった。質問は、セカンド・キャリア問題よりもレッズや Jリーグの経営上の問題が多く、本旨からは多少逸れたが、有意義であった。しかし外部からの講師には一円も出ず、すべて内海の持ち出しであった。乞改善。

それにしても、200 名の教室に 300 名の登録とは矛盾している。

教室は 1201 の長細い教室であり、極めて授業がやりにくい教室である。次年度は是非とも TA が欲しいと思った。

運動と体力の科学（渡辺雅之 木2：冬）

スポーツや運動と健康などタイムリーなトピックもまぜてのコメントを出席票にかいてもらったが、授業の終了のベルがなっても書いている人が多かった。心拍数の実測（3 人一組でアッシュネルの実習）をやったが、皆、面白がってやっていた。簡単な生体反応で人体の不思議を体験してもらうことが出来、このような計画をもう一つぐらい入れてみてもいいのではない

かと思う。

テストの時、終了して退席する学生が机の消しゴムかすを拾い集め、手の中にそれをおさめたのを見た。それが一人、二人と次々と。なかには一度席を離れた後にもどって机上をきれいにしている人もいて、学芸では見られない風景だった。

スポーツと映像文化（鬼丸正明 木3：冬）

本年はオリエンテーション参加者が 546 名。初めて抽選を行い、（辞退者を予想して）423 名を合格者として受講を許可した。最終受講者数は、予想より辞退者が少なく 427 名。来年度抽選を実施する場合はもっと合格者数を減らす必要があるだろう。そしてオリエンテーションにも参加せず、当然抽選にも合格してないのに、履修登録をしてきた学生が多かった。システム上の問題として考慮すべき課題だと思われる。

抽選の効果だろうか、今年の不合格者は 12 名。出席率は約 79%。12 回の授業中、学生の平均出席回数は約 9.5 回。我が学生生活を顧みるに隔世の感がある。

本年の授業では最終授業で（例年はリーフェンシュタールの『オリンピア』で終わっていたが）授業の総括として、全授業を簡単に復習して、そこで学んできた観点から今日のスポーツ映像の動向と、それを見るときにいかなる視点が必要か論じた。それによって今まで聞いてきた授業の各論点が明確に結びついた、映像とスポーツの関係がよく分かった、スポーツ映像を見る視点が理解できたとして、好評だったので、来年度以降の最終授業では総括を必ず行うようにしていきたい。

スポーツと文化（高津勝 火3：夏）

受講者：39 名

・授業概要：講義のテーマは「スポーツはどこから来て、どこへ行くのか～スポーツの過去・現在・未来～」。今日の文化現象としてのスポーツを、歴史的な発展過程をふまえながら考察することとし、前半は講義を中心に、後半はグループ活動を中心に展開した。なお、期末にはグループ別のプレゼンテーションを行い、それを期末レポートとして提出させた。

講義の柱は、スポーツの発達史、スポーツとマスメディアー「メディアスポーツ」、グローバル化とスポーツ。グループは受講生の希望に基づいて編成することにし、その構成は「スポーツと武道」「スポーツとマスメディア」「ファン・サポーター」「プロ野球改革」「j bリーグ」「スポーツとナショナリズム」「オリンピック」「セリエAと不正問題」。

・学生の反応：学生はそれなりに自分たちの見解をまとめ、受講生の前でプレゼンテーションをすることができる。ただし、教師の講義内容や問題提起を適切に受け止めた上でそうしているかどうか、必ずしもそうとはいえない。そのギャップを埋めることが、今後の課題となる。

・評価：出席、その都度の小レポート、中間レポート、グループ活動への貢献度、期末レポート（集団的な作業という面も評価）を考慮して総合的に評価。

	曜日	学期	時限	科目	担当者	A～D	F -	合計	Aの割合
1	火	夏	2	ヒューマンセクソロジー	村瀬 幸浩	320	33	353	0.63
2	火	夏	3	スポーツ文化	高津 勝	35	4	39	0.33
3	金	夏	4	現代スポーツ論	坂 なつこ	186	69	255	0.24
4	火	冬	2	国際スポーツ運動	上野 卓郎	6	13	19	0.67
5	火	冬	3	スポーツと権利	内海 和雄	239	56	295	0.63
6	木	冬	2	運動と体力の科学	渡辺 雅之	40	13	53	0.14
7	木	冬	3	スポーツと映像文化	鬼丸 正明	415	12	427	0.39
						1241	200	1441	
								合格率	86%

(4) 教養ゼミ

本年度の教養ゼミの開講は3コマで、昨年度は6コマ開講であったから、運動文化担当者の開講数が半減したことになる。この要因としては、早川氏の後任が不補充であったこと、持ち出しによる(ノルマを超えた)開講がなかったこと、運動文化講義と教養ゼミのどちらかの開講という選択制をとっているため、例年、若干のバラツキが生じること、などの要因が重なったためと思われる。今後は、レアプラン作成段階で、講義開講とゼミ開講のバランスを考慮し、必要があれば若干の調整をすることも考えられる。

また、受講者数については、ある程度の多声的なディスカッションが可能になる人数が望ましいとすれば、ゼミテーマの設定においてある程度学生のニーズを考慮することも必要かもしれない。(藤田和也)

以下は、担当者によるゼミ概要である。

教養ゼミ 藤田和也(火1:夏)

テーマ: 現代社会と健康・教育問題 受講者: 14名

オリエンテーションで受講希望者に上記のテーマにかかわる問題関心を書かせ、それに基づいて同じような(似通った)問題関心を持つ者でグループ編成をし、グループ毎にテーマ設定、テーマにかかわる問題整理と探求課題の設定、研究方法の決定と研究作業の見通し、探求作業、プレゼンテーションと質疑、作品(研究集録冊子)づくり等に取り組んだ。

今年度のグループ編成は、少年犯罪G、ニート問題G、教育問題G、医療問題Gに分かれた。また、学期の途中と末で、中間報告会と最終報告会としてのゼミ合宿(1泊2日)を2回もった。全体として、合宿での報告と討議、作品化された研究集録(B5版で162頁)の質などにおいて、かなり充実した成果が得られたという実感を持った。

教養ゼミ 岡本純也(水2夏)

テーマ: 観光による地域活性化 受講者: 2名

一昨年度の受講者が20人ほどであったので、今年度も多くの希望者があるだろうと、選抜方法などを考えて1回目のオリエンテーションに臨んだが、ほとんど希望者がなく2名の受講

となった。まずは『「観光のまなざし」の転回 - 越境する観光学』(遠藤英樹・堀野正人著)を輪読し、その後各自のテーマを検討した。一人は父親の出身地である西伊豆・土肥の観光活性化策について、もう一人は、自身の出身地である鹿児島川内地域の「おはら祭り」が渋谷で行われていることについてレポートを提出した。

やはり二人だと、議論をするにはやや少ないと感じた。

教養ゼミ 尾崎正峰(木2:夏)

テーマ: スポーツ問題への接近の視角と方法 受講者: 1名

内田義彦『読書と社会科学』(岩波新書)を最初のテキストとした。

その後は、それぞれの興味あるスポーツに関するテーマに基づく文献を読み(関連する文献を検索してくることもゼミで学ぶこととの位置づけをしている)発表を行なった。

毎回レポートであるので、学生にとっては決して楽ではなかったと思われるが、討論の際にはさまざまな角度から対象を見ることについての意見交換を行い、学生なりの手応えを感じ取っていたと言える。

(5) 学部講義・ゼミ

商学部講義・スポーツ産業論 岡本純也(金3・冬)

受講者: 30名

授業担当者の講義4回(スポーツ産業の定義と範疇、スポーツ産業の特徴など)、ゲストスピーカーの講義2回(スポーツマーケティングの実際)、グループワーク発表準備2回、グループワーク中間報告2回、グループワーク最終報告2回という時間配分で、主にグループワークを中心にした授業を展開した。受講者の人数が比較的少なかったこともあり、ゲストスピーカーの講義や中間・最終報告の場での活発な質疑がなされた。グループワークの成果は最終的にレポートとして提出された。今年度のテーマは以下のとおり。

「選手のキャリアを考える」

「フライングディスク: フリスビーを脱却するには」

「マイナースポーツをメジャーにするには」

「ヨガブームを検証する」

「フィットネスクラブ業界研究」

「「マネー・ボール」の実態と課題、日本球界への応用」

「地方サッカーチームの格差問題」

「日本サッカー界の現状と課題: 日本サッカーが強くなるには」

「日本プロレスの課題」

社会学部講義・身体と教育 藤田和也(火1・夏)

今年度の「身体と教育」は休講(「教育課程編成論」を開講したため)。

社会学部講義・社会学部発展科目「スポーツ問題の社会学」 上野卓郎（火2・夏）

履修登録 30 名、うち 13 名が授業に参加し、8 名が論文を提出した。他の 5 名は授業でのテーマ発表にもかかわらず論文提出にいたらなかった。以下、提出論文をまとめた『スポーツ問題の社会学論集 2006』の「まえがき」を引用する。「1 名を除き 7 名は 3 回のテーマ発表を経て、短い執筆期間で論文（40 字×40 行×5 枚）にまとめた（1 名は 2 回の発表）。授業では 3 - 4 名のテーマ発表と討論が繰り返し行われたが、2 回目の発表以後、10 名前後の参加者が減り始め、3 回目の時点では発表者のほうが討論参加者よりも多いという状況が生まれた。それでも最終的に論文を提出した受講生が 8 名であったのは、この状況からすればまずまずとしなければならない。しかしながら、2 回目の発表の時点での活発な状況がなぜ変化したのか、他の 5 名の受講生がなぜ論文提出にいたらなかったのか、担当者として力の及ばなかった結果に反省しているところである。」

論文のタイトルは以下の通り。1.マイナースポーツのメジャー化戦略 ハンドボールの事例から（3年）2.スポーツクラブの株式上場を考える（3年）3.ファン以上に熱狂する企業たち スポーツイベントの商業主義の側面を考察する（4年）4.2006年 FIFA ワールドカップを巡る反省（4年）5.「メディアとスポーツの健全な在り方」について考える（4年）6.柔軟性概念について（4年）7.ドーピングの種類とその範囲（3年）8.日本におけるスポーツ英才教育の現状と展望 英才教育の可能な社会とは（4年）6はトレーニングの現場と科学における柔軟性概念批判を論じたもの。

* なお、社会学部 1 年必修「社会研究の世界」(水 1 夏)で「スポーツ社会学」を昨年に続いて担当した。

社会学部講義・身体社会史（大学院・学部の共修科目） 尾崎正峰（木2・冬）

受講者：3 名（実質参加者）

内容については、下記「大学院講義」と同じ（「共修科目」のため、大学院生と学部生が同時に取れる科目であるので）。

社会学部講義・スポーツ社会学の基礎 坂なつこ（月3・冬）

受講者：登録 199 名

昨年と同様、社会学の各論がどのようにスポーツにアプローチしているかという点を中心に講義を行った。社会学の基礎をなるべく説明しながら、そこからスポーツへとつなげる点で苦労した。毎回コメントを求め、説明が不足している部分や理解が困難な部分をなるべく次の回で説明したが、これは「丁寧だ」と評価される一方で、時間配分が難しく、本題がおろそかになるなどバランスがとれなかった点が反省点である。今年はビデオなどを活用した。おおむね好評であったと思うが、第一講義棟の 401 室は AV 機器の使用に制限のある教室であり、非常に不便であった。常時受講したのは 120～150 人前後。

< 学部ゼミ >

学部ゼミ 岡本純也 (木5・6)

受講者：14名

4年生がサブゼミ生も含めて9名、3年生が5名の計14名という大所帯となった。夏学期はテキストとして『企業スポーツの栄光と挫折』(沢野 雅彦著)を輪読するとともに4年生の卒論の検討を行った。冬学期は『映画に学ぶスポーツ社会学』(杉本厚夫著)をテキストにし、残りを卒論の検討に充てた。夏休みには1泊で熱海に卒論検討を中心にしたゼミ合宿を実施した。人数が多いこともあり、意見や質問を出す者が偏ってしまいがちであった。来年度はもう少し人数を減らし、活発な議論を期待したい。昨年度、早川ゼミと合同で行った年度末の卒論発表会は、今年度からは単独開催となった。学外からOBも含め3~4名の出席者があり、2日間にわたって活発な議論がなされた。この会は卒論を書いた者だけでなく3年生にも大変良い刺激となると考えられるため、来年度以降も継続して実施していきたい。

社会学部ゼミ 藤田和也 (月3・4)

テーマ：子どもの発達と社会

受講者：6名

4年生1名、3年生5名。年度当初、ゼミ員の研究関心について話し合わせ、ゼミでの共通テーマの設定にしばらく時間を費やした。その結果、「子どもとインターネット」に決まり、今日の携帯やパソコンによるインターネット利用の普及が子どもたちにどのような影響を及ぼし、子どもの発達にとってのインターネット利用や教育のあり方にどのような課題があるかを明らかにしようということになった。このテーマのもとに、インターネットが子どもの心身に及ぼす影響 インターネットとコミュニケーション 有害サイトが子どもに与える影響 情報教育の目標と現状、という小テーマに分かれて研究分担することになった。夏合宿などもまじえて、年度末にそれらの研究成果が冊子にまとめられた。

社会学部ゼミ 高津勝 (木4・5)

受講者：3年生2名、4年生5名

3年生は最初にスポーツ社会学に関する基本文献を輪読し、そのあと、地域調査の準備活動に入り、9月末、尾崎ゼミの協力を得ながら、さいたま市で市の体育・スポーツ行政、および、2つのJリーグ・クラブの地域スポーツ活動について実地調査を行った。冬学期は、調査報告書の作成作業を中心に運営し、報告書作成後、原書講読を行った。書名は Clarke, John & Critcher, Chas: The Devil Makes Work. Leisure in Capitalist Britain, Macmillan Publishers Ltd., London 1985.

地域調査報告書のタイトルは「さいたま市のスポーツ振興とJリーグ 浦和レッズとアルディージャ」。内容構成は以下のとおり。

はじめに

第1章 さいたま市のスポーツ振興とJリーグ・クラブ

第2章 浦和レッズとレッズランド Jリーグのリーディング・クラブをめざして

第3章 大宮アルディージャ 企業クラブからの脱皮と地域密着
資料編
あとがき

4年生のゼミは卒論指導を中心に行った。卒論のテーマは以下のとおり。

「スポーツと国籍」

「メディアスポーツの現状と課題 - 恣意的なスポーツ放送によって歪められるスポーツ中継 - 」

「地域における生涯スポーツの現状」

「W杯の中継研究 - 実況が語ったもの」

1名は留年することになった。

社会学部ゼミ 尾崎正峰（木4・5）

受講者：1名（4年）

今年度は、3年ゼミは0名。教員は、高津ゼミ3年の活動への協力として、さいたま市調査（さいたま市、浦和レッズ、大宮アルディージャ）に関わった。

4年ゼミは、就職活動が落ち着いた6月以降、卒論執筆に向けての討論を重ねた。

社会学部ゼミ 内海和雄（月5・6）

受講生なし。

社会学部ゼミ 上野卓郎（木4・5）

受講生なし。

社会学部ゼミ 坂なつこ（木4・5）

受講生なし。

（6）大学院講義・ゼミ

大学院講義 岡本純也（木2・夏）

講義テーマ：スポーツイベント論 受講者：5名

今年度は「ファンについて考える」というテーマを設定し、スポーツファンと宝塚歌劇のファンの比較検討を行った。宝塚歌劇に関する文献を読むと同時に、現役のタカラジェンヌを招き、実際のファンの活動や劇団とファンとの関係について話しをしてもらった。

大学院講義 藤田和也（火2・夏）

講義テーマ：保健社会論（教育保健論） 受講者：5名

受講者は、M1 - 2名、M2 - 1名、D1 - 1名、D2 - 1名。「子どもの健康・発達問題と現代社会」という共通テーマのもとに、受講者のそれぞれの研究関心あるいは問題関心に沿って小テーマを設定し、それぞれがそのテーマにかかわる問題整理と問題の深めをしながら、報告・討議をするというスタイルをとった。設定された小テーマは、以下のとおり。

「少子高齢化社会のなかでの子育て支援」「子どもの育ちとネットゲーム」「少女漫画と女性の居場所」「中国における子どもの食に関する問題」「『きれいな虐待』についての考察(虐待と自傷との関係)」などであった。

大学院講義 高津勝(木3・冬)

講義テーマ：地域スポーツ論 受講者：1名(M)

「民俗競技から大衆娯楽へ スポーツ・スペクタクルの歴史・社会的究明」

上記のテーマをベースにしつつ、参加者の問題関心を積極的に取り入れ、適宜、関連する文献を選定してディスカッションをする方式で行った。

大学院講義 内海和雄(火3・夏)

講義テーマ：アマチュアリズム論 受講者：5名

講義は教員から前半1時間講義があり、後半の30分間を討論に当てた。スポーツ社会学以外の院生も2名加わり、社会科学としての議論は活発であった。

大学院講義 上野卓郎(水2・冬)

社会科学の基礎(社会人大学院生プログラム講義)。受講者1名。マックス・ウェーバー『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』の講読。

大学院講義 尾崎正峰(木2・冬)

講義テーマ：身体社会史 受講者：3名(実質参加者)

テーマとしては「身体をつくりかえるとは？」を掲げた。

教員による講義としては、「ドーピング」「健康ブーム」「戦時下における『健康』」を小テーマとして実施した。もう一つの柱として、受講生各自のテーマに関する発表、討論を行った。そこでのテーマは、「ヨガブーム」「大正期の学校体育」「スポーツマッサージ」であった。

大学院ゼミ 岡本純也(木3)

受講者：6名

サブゼミ生、東工大からの参加ゼミ生も含め、4人が修論執筆の年にあたり、ゼミではほとんど修論の検討に時間をさいた。スポーツ社会学のマスター1名、ドクター1名がコンスタントにゼミに参加し、非常によい刺激となった。初めて指導教員として、修士2年生を担当したが、修士論文の指導とは非常に大変な仕事であるということを実感した。指導力をつけるためには、自分の研究にじっくりと取り組まなければならないと思われる。

大学院ゼミ 藤田和也(火3)

講義テーマ：教育実践研究の方法 受講者：5名

教育実践を直接の対象にした研究方法のいくつかについて受講者の関心に基づいて選び、その方法論的な検討を各自のレポート報告とし、その報告と質疑を中心にゼミを進めた。選択さ

れた研究法（報告討議されたテーマ）は、以下のものであった。

「フィールド・リサーチ 現地調査の方法と戦略」「ライフヒストリーの聞き方」「教育史研究の方法をめぐって」「オーラルヒストリーの世界」「教育の社会史研究の方法をめぐって」「『教育実践論』の方法試論」

大学院ゼミ 高津 勝（木2）

受講者：2名（博士課程）

論文指導を中心に行った。

大学院ゼミ 内海和雄（火2）

講義テーマ：スポーツ社会学研究 受講者：4名

外部から研究者1名が加わり、活発であった。順番の個人発表に加え、英語文献の読了、そして12月と3月にイギリス・ラフバラ大学から招聘したイアン・ヘンリー教授とアラン・ベアナー教授の資料を読んだ。

大学院ゼミ 上野卓郎（木4・水2）

木曜4限、1名（社会人入学M1）。修論計画に基づく研究発表の積み重ねと、ユルゲン・コッカ『社会史とは何か』の講読、『アナルとは何か』のレジюмеと討論とともにル・ゴフ『中世の身体』をめぐる意見交換をすすめた。

*なお、4年前から博士論文指導委員だった院生（現在学振特別研究員）の論文審査を行い、7月研究科委員会で審査報告をして承認された。研究はドイツ社会史、女性史、通信技術史と身体史、それに日独比較史にまたがる膨大な実証成果を結実したものであった。

大学院ゼミ 尾崎正峰（水2）

講義テーマ：スポーツのグローバリゼーション 受講者：2名

テキスト（『越境するスポーツ』、スポーツと地域開発関連の文献、等）の輪読、および、院生の研究発表の2つの柱で進めた。

3．教育条件の整備・拡充

今年度から予算編成のしくみが変わり、年度当初に全体の施設整備の要求項目を提出する事はなかったが、その都度、施設改善要求を提出した。また、2006年度初めにボクシング部部室建設問題が突如持ち込まれ、対応した。それと同時に幾つかの事項をめぐって学内の調整機構に不都合が確認され、対応が求められている。

1．施設整備要求

（1）テニスコート

テニスコートの水はけについて

テニスコートの水はけについては、クレーコートとオムニコートの中の側溝が機能せずに、雨の後、コートは使えてもボールが泥だらけになるという事態を招いていた。これは以前から指摘されており、水はけ改善を長年要求し続けてきた。2005年度には、学生支援課宛防球ネットを要求していたが実現していなかった。

2006年度も梅雨時に昨年よりひどい状態になったので、テニス担当者と教務課、施設課と現場検証し(2006.6.19、3限終了後)対応策として、防球ネット、砂利敷設の見積もりを業者に依頼した結果、泥よけネット(2005年度要求と同じもの)が現状では最善策であるということになり、ネット取り付けの工事をしてもらった(2006.7.3)次の日から早速威力を発揮した。

しかしそれでもなお、泥がたまってくるので、泥除去の要求書「テニスコートの排水溝改善要求(教務課総務係、2006.8.22)」を提出したが、今年度は実現しなかった。排水溝を改善しなければ根本的な解決にはならないことは、施設課も理解してくれた。

オムニコートの補修

オムニコートの破損が随所に見られ、全面張り替え、あるいは部分張り替え補修要求(学長裁量経費、2005.4.26)を教務課に提出し、補修については学生支援課にも相談していた。

2月になって、サークルからの要請で、破損がひどくなっていたサーブライン付近の部分的な補修が行われた。これは、急を要するので教務課と相談の上、例年のコート整備の際に補修を行うことになった、と学生支援課より連絡があった(2007.2.19)。しかし、来年度予定されている後援会予算のうち、オムニ補修の見通しははっきりしなくなったという情報があった。

(2) 学生支援課への「運動施設改善・整備要求」提出

課外活動との運動施設利用調整会議(2006.12.7)で、運動文化科が教務課を通して提出している施設改善要求について、学生支援課として情報がないとのことで、以下の資料を提出した。教務課、学生支援課と共同で要求すれば実現性が高くなることが予想されるので、両課との連絡調整がよりいっそう望まれる。

資料:

学生支援課御中

2006.12.11 運動文化科

運動施設改善・整備要求

1. テニスコート

排水溝改善 (参考 2006.8.22、2005.6.23)

オムニコート (参考 2005.4.26)(学長裁量経費要求書参考)

全面張り替え、部分張り替え補修

日よけの設置 (平成17年度学長裁量経費要求書参考)

2. 陸上フィールド (平成17年度学長裁量経費要求書参考)

芝がはげて黒土が出ているところに芝を植えて、全面芝にしてほしい

2月の陸上競技場改修工事の時に、黒土を入れるだけでもと依頼したが、実現せず
器具庫前に砂置き場、黒土置き場の設置

地面に直に置いてビニールカバーをしているが、散らばって周りが汚くなる。

3. 多目的グラウンド(現ゴルフ練習場付近及び空手道場の南側付近)(参考 2006.5.11)
フットサルコートに整備
金網のフェンス設置
4. 体育館
各コートラインの塗り替え
フロアーワックスの改善(年に一回でいいから業者にワックスをかけてもらいたい)
北側内壁の破損修理(時計の下付近)
5. バレーコート
排水溝改善 体育館との間の排水溝がすぐ泥で埋まってしまう
6. クレーコートのオムニ化
7. 新体育館建設
(*参考として、平成17年度学長裁量経費要求書を添付した。)

(3) その他の要求

その他、要求した項目は以下の通り。

- ・体育館周辺の樹木剪定のお願い(学務課総務係)2006.7.27 実現せず
- ・体育館内女子更衣室換気改善要求(学務課総務係)2006.8.22 年度末*アスベスト対策参照
- ・テニスクレーコート及びバレーコートの整備等についてのお願い(教務課)2007.1.26
例年通り

以下は、要望はあったが次年度に回したものの。

- ・野球場の倉庫(野球場改修で、散水器設置のために水道工事があるので、その後)
- ・西器具庫付近の砂置き場の囲い整備

2. ボクシング部部室建設問題

経過:

2006年4月21日、「空手部と運動文化科にも話しておいた方がよい」という事で、初めて、学生支援課からボクシング部部室建設案(空手道場北側案)の話があった。

そこで、4月27日、内海が田崎副学長に会見し、事実経過を聞いた。案として出された当該地は、体育館建設地であることを強調した。

その後、5月16日の常任役員会で決定の可能性もあることから、急遽、田崎副学長に内海・高津・坂の3名が面談をし、「スポーツ施設建設予定地の整備について」(2006.5.11、資料参照)を提出した。再度、体育館建設予定地である旨を強調し、それが実現するまではフットサルコートとして整備するよう要望した。この中で、2000年5月24日付けの評議会議事要録が決定的な資料となった。

5月30日、常任役員会において、ボクシング部部室は体育館東側に変更して建設することが決定され、夏休み中に建設された。

ボクシング部部室建設に関わる以上の経過は、学内の運動施設の建設、利用などに関する部

署間の連絡調整機関が無いために発生したと考えられる。従って、今後は同様の混乱を起こさないためにも最低年1回の、副学長の下での調整会議を設置することが望ましいと考え、副学長主催の「運動施設整備・利用調整会議（仮称）」の設置を要求することになった。

資料：

2006.5.11

田崎宣義・副学長 殿

山崎秀記・大学教育研究センター長 殿

学生課 御中

施設課 御中

一橋大学運動文化科

スポーツ施設建設予定地の整備について

1. 従来経過

表記の件について、2000年11月13日「『新体育館・プール予定地の用地変更』にかかる『体育施設等』の整備について」（田崎宣義副学長に）、2001年1月10日「東キャンパス内の体育施設に関する当面の拡充・整備について」（寺西重郎副学長に）、2003年7月3日「授業に関わる施設整備について（要望）」（杉山武彦副学長に）を提出しました。さらに2003年10月28日に石弘光学長と懇談を持ち、新体育館の建設を要望しました。この間、今年度から概算要求での「施設整備事業費」に「体育館改修」が復活したこと等に関して感謝申し上げます。

さて、現在表記の件についての大学側の対応は以下のようになっています。

2000年5月29日の関東財務局による行政財産実地監査に向けて当該地が未利用地として処分の対象とされる可能性のあることから、当該土地確保のため、土地の用途計画を変更して「スポーツ施設（ホッケー場、ハンドボールコート等）建設予定地」とし、今後の対外的な折衝等に対応していくことを決定しました。その際、運動文化科との同意として、次の条件を評議会議事録に明記しました。「将来、予算措置が可能となった場合は、国立地区にプール・体育館施設を建設する。」（2000年5月24日、評議会議事要録）

その後人工芝を張った多目的グラウンドとして整備される計画も浮上しましたが、実現しないまま現在に至っています。一方、国際研究館の建設により、ゴルフ練習施設のこちらへの移転がありました。

以上の経緯からも明確なように、当該地は授業を主目的とするスポーツ施設建設予定地であることは明白です。

2. 運動文化科の要望

従来経緯を踏まえつつ、当面はプール・体育館建設の可能性は無くとも、長期的な視野から、現空手道場地も含む一帯をスポーツ施設建設予定地として確保し、以下のような施策の具体化を要望します。

多目的グラウンド（人工芝が望ましい）として整備し、授業に活用する。かつ一般学生の使用に広く開放する。

実施種目はフットサルコート 2 面（フライングディスク、フラッグフットボール、バードゴルフ、バスケットボール、ハンドボール等が共用できる。）

多目的グラウンドは金網のフェンスを設置する。

空手道場については、西キャンパス内の如意団道場付近に移築する方向で検討する。

同グラウンドは現在いくつかのクラブが練習場として、そして多くの一般学生が活用しています。一般学生にとって、気楽に運動の出来る場所が現在はこちら以外には存在しません。こうした施設は学生の身体的健康ばかりでなく、近年一層深刻化する精神的健康を維持する上からも是非とも必要なことであると考えます。

現在、ボクシング部からの練習場建設要求が現空手道場北に提起されています。もしこの案件が認められるならば、同様なケースが続発し、同地区はそのための集中地となりかねません。現に他のいくつかのクラブでも建設要求があると聞いています。

今回のボクシング部からの要求については、キャンパスの長期的、総合的な視野の中で対応されることを要望します。

以上

3．運動施設整備・利用調整会議（仮称）の設置要求

今年度、ボクシング部部室建設の他に、教務課ではなく学生支援課や施設課から次のような報告を受けた。

野球場の改修に関連して

課外活動との運動施設利用調整会議（2006.12.7）で野球場の改修工事を学生支援課から知ることになる。授業期間中に工事に入ろうとしていることがわかったので、1月29日の授業終了時まで待って貰うことになった。工事工程表をもらったのが2007年1月23日。部署間の連絡不調整を感じた。

体育館の補修について

女子更衣室の換気改善要求は、教務課に提出し、その後施設課と業者が下見に来ていた（夏休み前）が、実現には至っていなかった。それが、「体育館フロア以外の修理を年度末予算で行うと施設課から連絡があった」旨の連絡が学生支援課よりあったのは、2007年2月19日である。その後、同日に財務部施設課から教務課へ以下の文書と工事図面の連絡があり、運動文化科への正式なルートでの連絡を受け取ったのは更にその後であった。「東キャンパス体育館の天井等改修工事におけるアスベスト対応について」（2007.2.20 付け財務部施設課）。

その後、3月7日より天井をはがす工事が始まっている。更衣室及び器具庫のアスベスト対策工事であるが、飛び散らない箇所だから、大丈夫だということであったが、施設課からの事前の相談も連絡もなかった。

以上、ボクシング部部室建設経過、野球場の整備をめぐる情報のズレ、そして体育館のアスベスト対策工事をめぐる経過など、この間、施設の増加、建設計画、運営など部署間の不調整による齟齬が生じている。これらの不都合をなくすためにも、運動文化科として、是非とも副学長、教務課、学生支援課、施設課、そして運動文化科等から構成される「運動施設整備・利用調整会議（仮称）」の設置が是非とも必要であるとの強い要望があり、この件は、2007年1月12日に内海が新副学長・坂内氏と懇談し、申し入れた。

4. フットサルコート建設をめぐる学生の動き

世間のフットサルの普及を反映して、本学学生のフットサル要求は高揚している。多くのサークルは、例えば小学校の学校開放で体育館を使用しているが、近年フットサルの使用を禁止する自治体が多い。本学の幾つかのサークルも4月から国立市の小学校から閉め出される。そうした背景のもとに、約10の関連団体が急遽集合して、2月初旬の試験期間に学生の署名1,433名分を集めて、学生支援課へ提出し、東2号館北側のフットサルコート建設を要求した。こうした行動は近年になく、学生たちの危機感と切迫感は強い。

その要望は授業推進上での運動文化科と共通するものであり、今後相互に話し合いを持つことも必要であろう。尚、授業優先であることは確認しておく必要がある。

5. 作業員さんの契約

契約は大学と業者との1年契約で決定されるものであるが、昨年、授業準備の都合上、通常より早く始業している実態に勤務時間を合わせてもらえるよう、運動文化科として要望した。それが受諾され、今年度はそれに則って実施された。作業員さんの献身的な作業もあり、授業は円滑に推進された。 (内海 和雄)

. 教育部活動

1. 実践交流会 (それぞれの報告については、巻末に掲載)

今年度は、非常勤講師のご協力を得て、2回の実践交流会が開催された。

- (1) ジャズダンスの授業 報告：白河善美 (2006年6月20日：職員集会所)
- (2) バドミントンの授業 - 2 報告：新村博信 (2006年10月24日：スポーツ科学研究室)

2. 教育活動日誌

- 2006/04/04 教育部会 (新年度顔合わせ会打ち合わせ) 新年度顔合わせ会
- 05/02 教育部会 (スポーツ方法・の履修者状況、ボクシング部練習場建について、実践交流会、自動体外式除細動器 AED 研修会)
- 05/30 教育部会 (実践交流会について、人事について)
- 06/12 実践交流会 (ジャズダンスの授業：白河善美)
- 06/27 教育部会 (シラバスの成績評価基準について、アンケートについて、施設関連、スポーツ施設建設予定地の整備について:要望書)
- 07/31 教育部会 (成績評価について、来年度カリキュラム:非常勤削減、サバティカル)
- 09/25 教育部会 (来年度カリキュラム)
- 10/31 教育部会 (来年度カリキュラム)
- 12/07 課外活動との運動施設利用調整会議
- 2007/01/25 教育部会 (療育コースの代替案、ウェブシラバス、「スポーツ方法アンケート」集計について、教員へのアンケート、総括と方針、予算関連、副学長への要望)
- 02/28 教育部会 (教育活動の総括)
- 03/06 教育活動の総括と方針会議

3. 調査活動

例年同様、2006年度もスポーツ方法の受講者に対して、われわれ独自のアンケートを実施した。スポーツ方法は冬学期末、スポーツ方法については夏・冬の学期末に行った。様式はこの数年間使用している質問項目と、2004年度まで全学共通の「授業評価アンケート」に組み入れていた5つの質問項目（スポーツ方法の目的に関する質問）からなる（巻末資料参照）。このアンケートは、われわれ運動文化科のカリキュラム編成の改善に役立てるとともに、授業担当者個人に結果を還元することによって授業改善に役立てている。

1. スポーツ方法に関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法の受講生
- ・実施期間：2007年1月の各授業時間内
- ・有効回答数：866人（登録者1073人）

（1）満足度

本年度（2006年度）は、昨年度（2005年度）に比べ「大変満足」が3.6%減少し（28.3%→24.7%）、「まあ満足」は8.6%上昇している（45.8%→54.4%）。合わせると79.1%となり、昨年度（74.1%）に比べると5%満足度が増加していることになるが、これは一昨年度（2004年度）とほぼ同様のレベルになっている。一方、「やや不満」の2.7%と「大変不満」の0.5%を合わせた値、すなわちなんらかの「不満」を訴えている者の割合は3.2%と、調査開始からの最低値となった。総じて、昨年度に比べると「満足度」が増加し、「不満度」は減少するという結果になっているが、大きな変化があったとはみなせないであろう。さらに付け加えるならば、「やや不満」（23人）「大変不満」（4人）と答えている者の分布は、特定の種目に集中することなく分散しており、このことより、スポーツ方法という科目全体として不満を訴える者は少なく、例年通り質の高い授業が行われているということができよう。

種目別にみると、「大変満足」と答えている者の割合が多いのは、フラッグフットボール（33.3%）、バレーボール（31.6%）、バドミントン（31.4%）である。「大変満足」と「まあ満足」を合わせると、剣道（100%）、バレーボール（92.1%）、バドミントン（85.9%）、フライングディスク（81.3%）、フラッグフットボール（81%）が80%を超える受講者の「満足」という回答を獲得している。では、具体的に受講生はどのような点に「満足」「不満足」を感じているのであろうか。自由記述にみられる「満足した点」「不満足な点」についてみていこう。

「満足した点」として一番多く表明されている意見は例年通り「仲間ができた」「友達が多くできた」というものである。また、「先生が丁寧に教えてくれる」「先生がいい人だった」「先生がやさしい」といった教員とのコミュニケーションに関する意見も多く表明されている。この結果からは、現在の大学生が友人や教員とのコミュニケーションを求めており、スポーツ方法の授業が、彼ら・彼女らのそのような欲求を満たす場として機能しているということが読み取れる。しかしながら、「不満な点」として「班以外の人と仲良くなれなかった」などの意見も出されており、グループの作り方やグループ間の交流などはグループでの学習の課題とされるであろう。

また、「満足した点」として「自由に練習できた」「自分たちで自由に活動内容を決められた」「試合が多くできた」「ゲームが多かった」という意見も多くみられ、このことは受講生が教師側の働きかけによる強制や拘束を嫌う傾向にあるということを表しているであろう。それは「不満な点」として「レポートを課すこと」「グループノートを課すこと」などが多くあげられていることからみてもとれる。理想としては、受講生が「強制されている」という感覚を持たずに、教員が（授業目標に向かわせるために）働きかける方向へと、自然に学習が進められていくことなのであるが、そうならない場合、なぜレポートやグループノートを課すのか、十分な説明がなされなければならないであろう。さらに、あまりに自由になると、「もう少し技術を指導して欲しかった」という意見が出されることにもなるので、「自由」と「働きかけ（方向付け）」の案配は非常に難しい点である。

「不満な点」として一番多い意見は、例年どおり、1限に開講することへの不満である。これは課外活動との関係で午後の開講が制限されている現在においては致し方ない課題である。そのような実情を十分に受講生に対して説明していくことも必要であろう。また、同様に、通年で「2単位」であることに対する「不満」も多く表明されているが、これに関しても実技種目がなぜ「2単位」であるかについて説明していくことが必要だと考えられる。

（２）方法 の履修希望に関して

スポーツ方法 の受講者でスポーツ方法 の履修を希望する者の割合は例年と同様の傾向を示している。「ぜひ履修したい」と答えている者も例年 10%前後であるが、今年は 9.6%を獲得している。「時間があえば」24.3%、「やりたい種目があれば」21.1%と合わせると、50%を超える者がスポーツ方法 の履修希望を表明していることになる。満足度別に履修希望者の割合（「是非履修したい」+「時間帯あえば」+「やりたい種目があれば」）をみると、「大変満足」と答えた者の中で 72.3% 「まあ満足」の中で 53% 「ふつう」38.8%と、満足度が低くなるにつれて履修希望も減少する。「やや不満」「大変不満」と答えた者における履修希望者の割合は低いのかというとそうではなく、それぞれ 36.4%、50%と比較的多くの者が履修希望を表明している。

（３）方法 の非履修の理由に関して

スポーツ方法 を「履修しない」と答えた受講生は 31%であり、これは昨年度とほぼ同数である（2005 年度：32.3%）。履修を希望しない理由の傾向もほぼ例年通りである。「方法 の履修非希望の理由（複数回答）でもっとも多い答えは「単位数が少ない」53.3%（昨年度は 57.3%）「ほかの科目を優先」44.3%（同 46.1%）である。

（４）スポーツ方法の目的達成に関して

スポーツ方法 の目的は「（ ）基礎的な体力の養成」と「（ ）スポーツを行い、楽しむ上での基礎的能力(技術認識、練習方法、技術習得など)の養成」「（ ）グループを通しての人間関係の形成」である。2005 年度より、「スポーツ方法に関するアンケート」の中に、履修した授業において、これらのスポーツ方法 の目的が達成されたかどうかを問う質問項目を設けた。

第 1 点目の「基礎的な体力の養成」に関してスポーツ方法 の授業が「体力の維持・向上」

に役だったと答えている者は61.5%（「大変そう思う」10.6%、「そう思う」48.6%）にものぼる。週に1度の運動によって彼ら・彼女らの体力が実際に維持・向上しているかについては疑問が残る点ではあるが、スポーツ方法の授業が彼ら・彼女らの運動欲求を充足させるための貴重な時間になっているということは事実であろう。第2点目の「スポーツを行い、楽しむ上での基礎的能力の養成」に関して、「技術・方法の認識の深まり」「技術・技能の向上」については、それぞれ72.2%、65.6%の者が肯定している。また、第3点目の「グループを通しての人間関係の形成」に関しては、「仲間ができたか」という質問に対して80%の者が「大変そう思う」「そう思う」と回答している。

われわれはこれらの3つの目的が達成されることによって「スポーツを（履修した種目を）楽しむことができる」という、スポーツ方法の目的が達成されると考えているが、「スポーツを（受講したスポーツ種目を）楽しむことができるようになったか」という問いに対して、83.7%の者が「大変そう思う」「そう思う」と答えていることをみると、スポーツ方法の授業ではこの目的に合致する教育の方法がとられ、その成果が表れていると評価できるであろう。また、上記項目の全てにおいて、今年度は昨年度を上回る数値が得られていることは、われわれにとって大きな自信を与えるものである。

（5）スポーツ方法の授業に対する要望・意見

「満足した点」「不満な点」については既述したが、「希望」についても例年と同様に「単位増」への要望、「二限以降の開講」などが非常に多く表出されている。また、施設・設備に関する要望も、例年どおり屋外バレーボールに関する意見が多くみられた。バレーボールは室内で行うものという固定観念が、不満となって現れていると考えられるが、新体育館、もしくは屋根付きの教場を実現し、これらの不満を何とか軽減したいものである。それ以外の屋外種目に関して雨天時の代替授業への不満は、多くは設備（屋内体育館・施設の不備、教室の確保、AV機器、ビデオ教材等）への不満となっており、体育施設の整備、AV機材、資料等の整備は不可欠であるといえよう。

2. スポーツ方法 に関するアンケート

- ・対象：スポーツ方法の受講生
- ・実施期間：夏学期 2006年7月、冬学期 2007年1月の各授業時間内
- ・有効回答数：222人（登録者数：450人）

（1）満足度

スポーツ方法においても例年同様にアンケート調査を実施した（巻末資料参照）。回答者の男女比は男子83.3%（2005年度：76.7%）、女子16.7%（2005年度：23.3%）と圧倒的に男子が多いが昨年度と比較すると女子の割合は減っている。また、学年別の比率は1年3.2%（2005年度：1.2%）、2年27.9%（2005年度：41.6%）、3年26.6%（2005年度：28.4%）、4年41.4%（2005年度：27.5%）であり、昨年度との比較では2年生と4年生の比率が逆転している。受講経験については、1回目（初めて）の受講44.5%、2回目の受講25.5%、3回目の受講18.2%、4回目の受講6.4%、5回目以上の受講5.5%と、回数が増えるにつれて減少

していく傾向にあるが、半数以上の者が反復履修者であることが分かる。

スポーツ方法 の満足度は、例年高い数値を示しているが、2006 年度も「たいへん満足」58.8% (2005 年度：52.9%)、「まあ満足」37.6% (2005 年度：39.9%)と、100%近くの者が満足(「普通」3.6%、「やや不満」0%、「大変不満」0%)と答えている。

(2) 履修理由

方法 の受講理由では、最も多かったのは「健康・体力を維持・向上するため」64.1% (2005 年度：61.5%)であり、続いて「この種目が上手になりたい」51.4% (2005 年度：47.1%)、「実施する種目が好きだ(やってみたかった)から」で 48.2% (2005 年度：50.5%)となっている。また、「親しい仲間をつくる」は 19.5% (2005 年度：12.6%)と昨年よりも値を増やしている。リピーターが増えていることがこれらの数値に表れているといえようか。

(3) 履修希望

反復履修者が多いことと同様に、方法 の来年度の履修を希望する者も多く存在する。「来年度は卒業している」と回答した4年生を除いた受講生の中で「ぜひ履修したい」と回答しているのは59.1%にもものぼる。これに「時間帯が合えば」26.8%、「やりたい種目があれば」4.3%を加えると、実に90.2%の受講生が反復履修を希望していることになる。

(4) 方法 への要望・意見

方法 においては、これまで単位の増加に対する意見が多く表明されてきたが今年度も同様な傾向にある。また、「チームスポーツなのに人数が少ない」や「レベルの差がある」「初心者がとけ込みにくい」などのスポーツ方法 全体に関わる意見も散見される。そのほか、多くが、それぞれの授業の教員の教え方や授業展開に関するは要望であった。これらの意見は、方法 にはより積極的に授業に関わろうとしている学生が多く集まり、それぞれの授業に具体的な改善点、工夫するべき点などを提言しているものと理解できる。このような意見はそれぞれの授業担当者に還元し、授業の向上に役立てたいと考えている。(岡本 純也)

4. 教育部の活動・体制

本年度の教育部の活動・体制を以下に示す。

- ・日常的な教育活動の運営に必要な基本的業務の遂行
- ・2007 年度のカリキュラムの編成
- ・部会の開催 = 9 回
- ・実践交流会の開催 = 2 回
- ・課外活動との運動施設調整会議(副学長主催)への参加
- ・スポーツ方法 への受講生に対する受講状況調査
- ・全学 FD への参加
- ・「われわれの教育活動 - 総括と方針 - 」の刊行

本年度の体制は坂(部長)、岡本、藤田、渡辺(庶務)であった。なお、今年度より、室長(内海)も、教育部会に出席した。(坂 なつこ)

・ 2007 年度教育活動の方針

1 . 2006 年度の達成と課題

2006 年度の課題は、次のように立てられた。

1 年延期された早川教授の後任採用へ向けて最大限努力する。

全学共通教育改革の動向を注視し、全学 WG の中間報告に関して、全学的にどのような議論が行われたのかについては情報を収集し、適切に対処する。

全学授業アンケートとスポーツ方法に関するアンケート（スポーツ方法アンケート）を利用し、学生の要求や意見、評価をふまえたカリキュラム編成、教育方法・内容の充実を心がける。教員へのアンケートではスポーツ方法の目的・目標に対応させて内容を検討する。

授業評価・成績評価について、大学教育研究開発センターと連携し、授業づくりをいっそう推進する。とくに「学生が求める充実した授業」像と「教員の考える理想的な授業」像とのベクトルの重なりを探求する。

「スポーツ方法」の単位数に対する学生の不満の解消に向け、半期 2 単位化の方向性を模索する。

体育施設の整備・拡充について大学執行部との交渉を含め、特に体育館建設については本学の長期的展望の形成へ努力する。また、関係各署（教務課や施設課など）の責任者との懇談の場を設ける。

多人数講義については、開講曜日・時限の変更、受講生の抽選など、その改善策を引き続き検討する。

スポーツ科学・健康科学の開講内容の関連を引き続き検討する。

実践交流会および教育活動の総括と方針づくり、冊子『われわれの教育活動』の充実に努める。

運動文化科のホームページの充実に努め、学内だけでなく、外部へも広く情報発信できるように内容を吟味する。

非常勤講師コマの削減および新任教員の不充足による専任スタッフの負担増を考慮し、教育部の体制および活動について検討する。また、全体的な視野から、体制について種目および科目も含め新たな方向性を検討する。

成果としては、全学授業アンケートの定着を鑑み、スポーツ方法に関するアンケートをより質的なものを把握するためのものとするため質問項目を変更した。また、教員アンケートについても、新しい評価基準が一定定着したものと考え、通常の質問に含むものとした。質問から削除しなかった理由としては、経年的に評価に対する経験や実績が蓄積されていると考えられるからである。将来的に GPA 制度が導入されることが示されているなかで、運動文化における評価基準についての実践経験を積み上げていくことは重要であると思われる。

多人数授業に関しては、抽選等の方法が定着してきた。しかし、ガイダンスに出席しないで登録するケースなどもあり、Web シラバス等を活用して事前のアナウンスを徹底する必要がある。施設に関して、学生支援課との意見の交流を行う機会があった。ここでは、教務課と

学生支援課との連携があまりなされていないことが判明したが、今後運動施設整備に関する全学的な調整会議の必要性を認識することができた。坂内・新教育担当副学長にも、室長が面談し、副学長主催の会議等の提案を行った。

引き続き課題として残ったものは多い。とりわけ、早川後任に関しては、諸条件から採用に至らなかった。さらに非常勤講師の削減とともに、スポーツ・健康科学の開講内容とその関連についての議論には着手できていない。教育部の体制および活動についての検討も不十分であった。今後、定年退職が続いていくため、種目の継続、あるいは新しい種目の開発等も視野に入れながらの全体的な見直しが、早急な課題となるであろう。

サバティカル取得については、今年度取得の原則を確認した。人員削減策が行われている現状を鑑み来年度は藤田が不完全ながらサバティカル取得となった。どのような体制のもとで完全サバティカルが可能であるか、引き続き検討していくことが重要であろう。

2 . 2007 年度の基本方針

2006 年度を引き継ぎながら、来年度の基本方針を次のようにする。

早川後任の 2007 年 10 月採用について可能性を追求し、2008 年 4 月着任は確実に実現する。

全学共通教育改革の動向を注視し、全学 WG の中間報告についての情報を収集する。

これまでの実践報告の積み重ねを参考に、学生の実技要求を汲み上げつつ、演習化、半期2単位化を可能とする授業のありかたを検討する。

「授業と学習アンケート」とスポーツ方法に関するアンケート（スポーツ方法アンケート）を活用し、学生の要求や意見、評価をふまえたカリキュラム編成、教育方法・内容の充実を心がける。

授業評価・成績評価について、大学教育研究開発センターと連携し、授業づくりをいっそう推進する。

運動施設の整備・拡充について大学執行部との交渉を含め、スポーツ施設建設予定地の具体化をめざし、概算要求の実現にむけて働きかける。また、関係各署（教務課、学生支援課、施設課等）との懇談の場の設置を要求する。さらに各クラブ等の OB の施設要求の動向についても情報を収集する。

多人数講義については、開講曜日・時限の変更、受講生の抽選など、その改善策を引き続き検討する。Web シラバス等での事前のアナウンスに気を配る。

スポーツ科学・健康科学の開講内容の関連を引き続き検討する。

実践交流会および教育活動の総括と方針づくり、冊子『われわれの教育活動』の充実に努める。

運動文化科のホームページの充実に努め、学内だけでなく、外部へも広く情報発信できるように内容を吟味する。

非常勤講師コマの削減および新任教員の不充足による専任スタッフの負担増を考慮し、教育部の体制および活動について検討する。また、全体的な視野から、体制について種目および科目も含め新たな方向性を検討する。

3. 教育活動

(1) 2007年度のカリキュラム編成と体制

<開講コマ：全学共通教育>

全学共通教育科目における運動文化科目の開講総コマ数は、通年コマに換算して 42 コマである。

	2007 年度		2006 年度	
総開講コマ数	通年コマ		通年コマ	
教養教育開講コマ	42	通年コマ	44.5	通年コマ
・方法 ()療育コース	28	通年コマ	30	(1)通年コマ
・方法	19	半年コマ	19	半年コマ
・健康・スポーツ科学	6	半年コマ	7	半年コマ
・教養ゼミ	3	半年コマ	3	半年コマ

<体制>

- ・専任は、早川後任の採用がなかったため、7人の体制となる。
- ・藤田のサバティカル取得分(不完全ながら)及び定年前の負担減は、非常勤講師を充てる。
- ・専任担当総コマ数は 22.5 コマとなる。
- ・非常勤コマの削減 10%であったが、専任不補充及びサバティカル等を非常勤コマで充当したため、非常勤担当コマ総数は 19.5 で、昨年度より 0.5 減となった。(2006 年度 20 コマ)。運動文化科目開講コマ数(教養ゼミ含む)に占める非常勤担当コマの割合は、約 46.4%である。(2006 年度 44.9%)
- ・非常勤削減のためやむなく高橋氏に辞めていただくことになった。
- ・非常勤講師の水口氏が都合で辞められた。青沼氏に代替をお願いした。

<種目別 2007 年度開講コマ数>

	スポーツ方法 = 通年		スポーツ方法 = 半年	
	2007 年度	2006 年度	2007 年度	2006 年度
テニス	10	9	5	5
バスケットボール	2	2	2	2
バドミントン	6	6	3	3
サッカー	3	3	2	2
バレーボール	1	1	0	1
ソフトボール	2	2	1	-
野球	0	0	1	1
ジャズダンス	2	2	-	-
フライングディスク	1	1	2	2
スポーツフィットネス	1	1	-	-
フラッグフットボール	0	1	-	-

剣道	0	1	-	-
療育コース	0	1	-	-
体操	-	-	1	1
ゴルフ	-	-	1	2
卓球	-	-	1	-
	28	30	19	19

< 2007 年度の特徴 >

- ・療育コースを削減し、代替措置として「健康上の困難があり、運動に支障がある学生についても、原則として各種目において対応」することになった（『学修ガイドブック』）。
- ・スポーツ方法 では、高橋氏が担当していた剣道と、水口氏が担当していたフラッグフットボールが削減となった。
- ・スポーツ方法 のゴルフを、夏学期 1 コマとし、新たに卓球を 1 コマ増にした。
- ・スポーツ方法 の 2006 年度の登録人数を配慮して、サッカーを、「サッカー(フットサル)」とし、バレーボールをソフトボールに変更した。
- ・スポーツ科学・健康科学は 6 コマ、教養ゼミは 3 コマ開講となる。

(2) カリキュラム、および教育内容・方法の充実

引き続き、専任 7 人の体制で臨むことになるが、同様に教育水準を維持発展し、充実した内容のカリキュラムの提供に務める。Web シラバスやホームページなど新しいツールの活用、また、従来雨天に多く用いられてきたビデオ、DVD 教材などを用いることは、多様な授業形態の模索にとって重要である。また、TA 等についても活用が検討されるべきである。方法では、「療育コース」削減にともない、健康上の理由で運動制限の必要がある学生に対しては原則として専任の授業で受入れるとした。そのため、受講生の希望や個別状況に大きく依存するものではあるが、ここでも教材の開発、授業方法の工夫などにより対応していくことが求められる。

「スポーツ方法 」

- ・授業ノートやグループ学習を活用し、学生が能動的に授業に参加できるように工夫する。また、学生の技術向上への要望や運動欲求などを鑑み、年間スケジュールや練習形式、戦術等の教授方法、グループ編成（同質/異質集団）についても工夫する。
- ・グループによる活動が授業において果たす役割、受講生の能動性やコミュニケーション、大学生活に及ぼす影響について多面的に考察する。グループ間の交流も促す。
- ・遅刻者や欠席者に対する指導に留意する。また現状を把握し、長期欠席者、再履修者のケアに努める。
- ・屋外種目については、雨天時の円滑な授業運営に努める。
- ・成績の評価基準について継続的に検討し、スポーツ方法に共通する基準を模索する。

「スポーツ方法 」

- ・新種目の開発や種目の継続など、今後の厳しい状況に対応すべく、実践交流会等において

さらなる検討と交流を重ねる。

- ・例年のアンケートを活用し、学生の満足・不満足の内容を検討し、いっそうの授業の質の向上を目指す。

「スポーツ科学・健康科学」

- ・学部科目との関係を検討し、それぞれの独自性と特徴を模索しつつ、より充実したカリキュラムを学生に提示できるように努める。また、そのための体系化の可能性を模索する。Web シラバス等の充実を図る。

「教養ゼミ」

- ・「ゼミ」形式の授業参加のあり方についても指導し、積極的な参加と教員とゼミ生およびゼミ生同士の交流を促す。
- ・レポート集などを作成した場合は、1部を運動文化科に寄贈し、成果の蓄積がなされるようにする。また、優秀なレポートについては、雑誌『一橋』への教員推薦を勧める。

4．教育条件の整備・拡充

教務課及び学生支援課と協力して教育条件の整備・拡充に取り組む。

1．テニスコート

排水溝改善

オムニコート

全面張り替え、部分張り替え補修

日よけの設置

2．陸上フィールド、野球場

フィールドの整地と芝生の整備

器具庫前に砂置き場、黒土置き場の設置

野球場の器具庫設置

3．多目的グラウンド（現ゴルフ練習場付近及び空手道場の南側付近）

フットサルコートに整備

金網のフェンス設置

4．バレーコートの排水溝改善

5．体育館

各コートラインの塗り替え

フロアーワックスの改善（年一回業者ワックス）

北側内壁の破損修理(時計の下付近)

6．クレーコートのオムニ化

7．現体育館の抜本的改修（床面積の増大、トレーニング室の設置等を含む）

8．プールの新設

5．運動施設利用に関する関係クラブ・サークルとの調整

例年どおり、次年度カリキュラム編成期に、副学長主催で関係クラブ・サークルとの調整を行う。各クラブ・サークルのみならず、学生支援課、教務課などとの意見交流の場としても充実させる方向で取り組む。

6．カリキュラム開発・教育方法改善のための調査、研究

例年の調査活動に加えて、それぞれの授業担当者の「学習のためのアンケート」の結果を検討し、運動文化科全体のカリキュラムおよび教育法改善のための資料とする。

7．教育部の活動

(1) 行事の開催

教育部会の定期的開催
実践交流会の開催
施設整備関係部署との交流
新年度顔合わせ会
教育活動の年度末総括

(2) 調査活動

「スポーツ方法」の満足度と「スポーツ方法」の受講希望調査（冬学期末）
「スポーツ方法」の満足度調査（夏・冬学期末）

(3) 資料・調査報告書・研究成果等の発行

「われわれの教育活動」の刊行
施設整備・改善のための基礎資料の作成

(4) 2007年度 教育部関係日程（案）

4月	3日（火）	新年度顔合わせ会
月	日（ ）	実践交流会1
月	日（ ）	実践交流会2
月	日（ ）	教育活動の総括・方針検討会議
月	日（ ）	年度末懇親会

われわれの教育活動

2006年度総括と2007年度方針

28

2007年4月3日発行

編集・発行 一橋大学スポーツ科学研究室 042-580-8270

運動文化教員室 042-580-8131

〒186-8601 国立市中2-1
